

ウヅの轍を踏んだのは、我輩でなくて、寧ろ君ぢやないか。「今や、一つの流行を作つた」と稱せられる我輩の肖像畫は、いまだに、何處の家でも明るい場所へ掛け替へられたといふ話を聞かないのだ。マルセル・ブルウストは、一九二〇年代の美術界を、どの孔からぞいてゐたのだと、後世の批評家は疑ふだらうよ。いや、もう、こんなことを云ふつもりはなかつたのだ。我輩は、たゞ最後に、凡そ趣味を解する人間が、自分の名を傍らに、別の名が並んでゐることを至極氣にするものだといふこと、その點、我輩は、甚だ君のために心を痛めてゐることを告白する。しかし、それは、もう取り返しがつかない。また、取返しを付けたくない。この序文が出来上るまで、君が度々くれた手紙に、僕が度々返事を書いた、あれだけで、僕の氣持はわかってくれと思ふ。辭退すべきものを辭退しなかつた理由も、君の友情を信じ、我輩の過を二重にしたくない、たゞそれだけだ。しかし、全世界のブルウスト黨は、この我輩の難題によつて、少くとも二つの「文字で書かれた見事な肖像」を君の頁の中に加へることが出来たのだ。一つは君のお父さんの肖像、一つは我輩の親爺のそれだ。たゞ、我輩に罪がありとすれば、それこそ、君の嫌ひな皮肉——その皮肉に満ちた自畫像を君に描かせたことだ。

ブルウスト (苦笑する)

グランジュ どういふわけだか、そこで我輩の名を故ら書いてないが、あの話は、全く思ひ出しても可笑しいね。アルマ行の乗合馬車で一緒になつた話さ。君はしかも、燕尾服だぞ。君の家には立派な馬車があつて、何處へ行くのにも大概それに乗つて出たものだ。それが、あの服装で、乗合だ。我輩、不思議に思つて、何處へ行くと訊ねたら、君は、妙に照れた顔をして、舞踏會だといふ。益々可笑しいと思つて、何處のつて訊くと、君は、ワグラムの舞踏會だつていふぢやないか。當時ワグラムの舞踏會つて云へば、大家の下男下女が、月一度の休みに開くワグラム軒のあれぢやないか。我輩は、驚いたが、また君のことだから、そんな酔狂をやるんだなと思つて、そんなら、もつと威張つて行け、招待されたやうな神妙な顔附は止したらいゝだらうなんて揶揄つた。すると、後で知れたんだが、ワグラム公爵夫人の夜會に行くところだつたんだつてね。家の馬車が、満員で、君一人乗合でやらされた、それを君は、大いに悄氣てゐたわけだつた。我輩は、それをまた手柄顔に吹聴して歩いたもんだ。ハ、ハ、ハ、君は、そのことを、人事のやうに突つ放して書いてる。

ブルウスト 今書けば、どうせ人事さ。

グランジュ だが、實際、君には、うつかりしたことは云へないよ。あれはどうだ、あ



れはもう人事かね。君が、あの處女作の沸きかへるやうな評判の中で、毎日、ヨカナアのやうに憂鬱な顔をしてゐた頃だ。我輩の顔を見ると、いきなり、かう云つたもんだ。——ねえ、君、僕のところへ、もう何通、いろんな奴から手紙が來たと思ふ。八百七十通だよ。それから、ポオル・モオランといふ男が、讚歌を作つて寄越したよ。新聞や雑誌の批評は碌に見ないが、目についたやつは腹の立つことばかり書いてある……。我輩が、それや、味方もあれば敵もあるさ、かういふと、なに、みんな味方面はしてるんだ。ところが、その味方面が癢にさはるんだ。そこで、我輩は、なんて云つたか覺えてるかい？

ブルウスト

(笑つてゐる)

グランジュ

——まあ、さう怒るなよ。また親爺が、當分絶對安靜を宣告するぜつてだ。君は、昔から、正しいといふことに對して、百合の花のやうに無垢な考へ方をしてゐた。そんなことは、片眼鏡式外交官的心理小説などに解る筈はない。ねえ、おい、マルセル、我輩は、君に、毎日でも會ひたかつたんだ。みんなが君に會ひたがつてゐるやうに、我輩も會ひたかつた。今だから云ふが、もう十年も前のこと、一度、こんなことがあつたよ。君を例のオッサマン通りの家へ訪ねたんだ。門番の奴が——ブルウストさんは、今、

ストラウス夫人のお邸へおいでになつてゐます。そこで、また、イエナの廣場へ引返した。今度は、——たつた今、レジャンヌ夫人の樂屋へいらつしやいました。その足で巴里座の樂屋さ。はひらうとすると、ポルト・リシュとエルヴェが廊下にはみ出してゐる。ミルポオの聲だけが部屋の中から聞えるんだ。我輩は、諦めて、君が、恐らく歸り途に寄るだらうと思つたセレスト嬢のサロンへ腰を据ゑたんだ。待てど暮せど君の姿は見えない。その時のセレスト嬢は、我輩の失望を、どう云つて慰めてくれたと思ふ。

ブルウスト

……………

グランジュ　かう云つて慰めてくれた。——あの人は、レジャンヌ夫人と二人きりになるまで歸りはしませんよ。そして、取つて置きか、フィエヌを一本あけてくれたよ。

ブルウスト　(目の前の書物を取り上げ、また、頁を繰りはじめる) 君、濟まないが、そこに紙切ナイフがあるから取つてくれ給へ。

グランジュ

(ナイフを渡す)

ブルウスト

ありがたう。

グランジュ　かうして本にしてみると、やつぱり、その序文はあつた方がいゝ。書き直して貰ふくらゐなら、止すつもりでゐたんだ。しかし、君が最後に手を入れたところは、



その通りになほつてゐる筈だ。

ブルウスト 君の剛情には全く弱るよ。今度ぐらゐ自分の書いたものに不安をもつたことはない。

グランジュ かうして、會つて話をしてからでも、まだ書き直したいか。

ブルウスト ……………(讀みつゞける)

グランジュ 君の仲間にも偉い奴はゐるだらうが、元來、新佛蘭西評論といふ雑誌は、君がゴンクウル賞を受けるまで、君の書くものを受け附けなかつたんだぜ。その理由は、君が社交界を題材にした小説しか書かないからといふのだ。そのことについて、我輩は「マタン」で、何時か手ひどくあの雑誌を攻撃してやつた。その時の、君の禮状みたいなものを、我輩はまだしまつてある。

ブルウスト なるほど、こゝのところは、少しひどすぎたな。

グランジュ (のぞき込み) 何處、え、何處……………。

ブルウスト (ある個所を示し) 言葉が足りないんだな。

グランジュ なに、かまわんさ。我輩は、この次の本で、その序文に對する返答を卷頭につけようと思つてゐる。今日、こゝで云つたやうなことを、みんな書くつもりだ。

ブルウスト それはよした方がいゝ。

グランジュ いや、さうするよ。これは君の友情に酬いるたゞ一つの方法だ。君の立場を明かにして、君の周囲のものを安心させてやるよ。

ブルウスト そんなことをする必要が何處にある。今、讀み返してみても、多少云ひ足りないところはあると思ふが、全體を通じて、僕の考へは明白に出てゐる。取り消さなければならぬところはない。

グランジュ それや、ほんとかい。

ブルウスト ほんたうだ。

グランジュ よし。ありがたう……………。

長い沈黙。

グランジュ 君の健康も、だん／＼恢復するやうだし、これからまた、どし／＼傑作を書いてくれ。君が、サラ・ベルナルの年まで生きられるんだと思ふと、我輩は實に愉快だ。そのうちに、アカデミー・フランセエズで、君は、ジャック・リヴィエールやアンドレ・ジイドと椅子を並べるだらう。ポオル・モオランも、その次ぐらゐにはひるかな。その頃は、ポオル・クロオデルが君たちの仲間に加つて、佛蘭西大統領に納まるだらう。



さうすると、我輩の繪も、お蔭で、肖像博物館に陳列されて、——おや、これは、家にあるジャック・グランジュつていふ三文畫家の繪みたいだ、なんて、臆面もなく立止つて見る見物人も出て来るわけだ。

プルウスト (ひそかに眉を寄せる)

グランジュ してみると、やつぱり、君の、あの志願兵の軍服姿を、一枚描いとくんだつたな。アツシリヤの王子みたいな奴をさ。

プルウスト (笑はうとしない)

グランジュ だが、我輩の繪は兎に角、モデルの選擇については、大に自慢してもいいことがあるんだぜ。

プルウスト それは、この序文に、僕が書いたことだ。

グランジュ あゝ、さうく。——但し自分を除いてはと、君は書いた。それを除かれてたまるもんか。君の肖像を描いたのも、君のゴンクウル賞以前だ。ジイドにしろ、バレスにしろ……………。

プルウスト (やゝ荒々しく) もうわかつてる。

グランジュ 大家になつてからの肖像なら、誰でも描く。その最も甚しいのは、ヴェロ

ニだ。君のところへはまだ來ないかい。

プルウスト ……………。

グランジュ もうぢきやつて來るから、見てお給へ。(間)怒つたのかい、マルセル……………。

プルウスト ……………。

グランジュ 我輩のお喋舌は、つまらんだらう。

プルウスト ……………。

グランジュ さうだらう。實際、それでなければ、三十年近く、訪ね合はないといふ理屈はないさ。しかし、お互、随分、いろんな意味で距りが出來てしまつたな。我輩は、つくづくさう思ふよ。君の住んでゐる世界は、もう、外からでなければ覗けなくなつてしまつた。それも、どうかすると、眩しくつて、よく見えないことがある。この間の手紙に、君は、我輩にだけは、なんでも云へると書いて寄越した。我輩もまた、君にだけは、何處を見られてもいゝやうな氣がしてゐるんだ。君は、昔、人真似のうまい男だつた。教師の聲色なんか、手に入つたものだつた。よく、それでみんなを笑はせたぢやないか。今、こゝで、ジャック・グランジュがジャック・グランジュの真似をしてゐるんだ。可笑



しければ笑つてくれ。我輩は………我輩は………君の笑つた顔を見て歸りたい。その記憶を、最後の記憶として、大事にしまつて置きたいんだ………(涙ぐむ)

長い沈黙。

ブルウスト (静かに) ジャック………モン・シエール・ジャック………赦してくれ。僕は今、ほかのことを考へてゐたんだ。いや、外のことではない。昔のジャックのことを考へてゐたんだ。あの頃、よく、頭髮あたまに花をさした美しい娘が、君のアトリエの前で馬車を止めさせて、君が繪を描くのを見てゐた。さも、君の描いてゐる繪が、よくわかるやうな顔をして見てゐた。その眼附には、しかし、ある不思議を感じる色が浮んでゐた。こんな立派な服装をした男の指から、しかも昨夜、食卓で、あんな面白い、あんな憎らしい話をした男の指から、どうしてこんな見事な繪が生れるのか、さういふ疑ひを、僕はその眼の中に讀んだのだ。ジャック！ このことを、僕は、この序文の中に書くのを忘れてゐた。さ、手を出し給へ。今日は、ひどく疲れたから、少し眠ることにする。案内はさせないから、いゝ時に歸り給へ。

二人は、長い握手を交す。

ブルウストが、横になつて眼をつぶるのを待ち、グランジュは、足音を立てないやうに部

屋を出る。

ベットの上面にあつた例の書物が、バサリと床に落ちる。



犬は鎖に繋ぐべからず



人物

今里念吉

同 二見

同 甲吉

黒林家の女中ため

酒屋の御用聞

大串葉繪

片倉州藏の妻まつの

女の子

百瀬鬼骨

郵便配達

男の子

歩兵大尉島貫

片倉州藏

平大野球部選手越水

同 クマソ

同 ヤモリ

近所の人権谷

同 尾畑

同 黒林



同	同	同	同	同	同
		近所の人	隱居多胡鶴人	同 藤卷	同 岩城
C	B	A			

時 現代

所 東京の郊外——最近水田を埋立てた第七流住宅地。



第一場

今里念吉の住居。正面に磨硝子戸入りの玄關。右手に杉丸太の門柱。玄關の右に澁塗りの洋館。左手に座敷と茶の間。芝生の庭に手製のブランコ。椽に近く粗末な犬小屋。初夏の午後。

息子の甲吉（八歳位）が、三輪車に乗つて外から歸つて来る。椽側から奥に向ひ、發育不良の聲で母を呼ぶ。

甲吉 ママア！ ママア！

聲 （奥で）なんです、そんな聲を出して……。二見、菜箸をもつたまゝ現れる）駄目ですよ、静かにしなくつちや……。パパは今御勉強なんだから……。

甲吉 （それにかまはず） ママア、僕、落第坊主ぢやないねえ。

二見 落第なんかするもんですか。からだが弱いから、先生と御相談して、一年學校を

休むことにしたんです。第一、學校へは一と月も行きやしないぢやありませんか。

甲吉 それから、うちのベスは野良犬ぢやないねえ。

二見 野良犬なもんですか。あれは、お前のお友達にと思つて、一昨年、湧山さんからいたゞいたんですよ。種類は忘れたけれど、ちゃんと素性のわかつた犬です。パパがもう少し手入れをして下されば、毛並だつて、この邊のどこの犬にも負けやしません。

甲吉 そんならね、ママ、うちのパパは、英語よりほか、なんにも出來ないつて、ほんど？

二見 英語の先生なら、英語だけでできれば澤山ぢやありませんか。いろんなことが少しづつ出來るよりも、一つのこと立派に出來る方がいゝんですよ。一體全體、誰がそんなことを云ふの？

甲吉 僕のことを落第坊主つて云つたのは、ケンちゃんだよ。

二見 ベスのことを野良犬だつて云つたのは……？

甲吉 それはね、坊つちゃん……。

二見 また、「坊つちゃん」なんて云ふんぢやありません。「ツルヲさん」つておつしやい。それから、パパのことをなんとか云つたのは……？



甲吉 忘れちやつた……。 (彼は三輪車を運轉して、また外へ遊びに行かうとする)  
二見 もう御飯だから、お家にいらつしやい。餘計なことを云ふ子供たちと遊ばなくつたつていゝのよ。

近所で、また、ピアノの練習を始めたらしい。單調な音階がうるさく繰り返される。

二見 (洋館の方に行き) パパ、あと十分で御飯にしますから、そろそろ、おつむをお休めになつてね。甲吉が歸つてますわ。

やがて、主人の念吉が座敷に現れる。

念吉 (にやにや笑ひながら、口吟むやうに)

“O miserable of happy! Is this the end

Of this new glorious World, and me so late

The glory of that glory?”……

(夢中で三輪車を運轉してゐる甲吉を見つけ) 甲吉君、元氣かね。さつき、床屋の前で、君に石をぶつゝけようとしてゐた子供は、あれや、何處のなんといふ子だい？ 君は平氣で三輪車の曲乗をしてゐたね。パパが通るのを知らずにあるから、パパは、黙つて來てしまつた。それに、友達の前で、おやぢに口を利かれるのは、てれ臭いもんだ。

永い沈黙。

甲吉君、運動は、もうそれくらゐにしといたらどうだ。此處へ來て、一息休み給へ。そして、パパと一緒に、青葉でも眺めようぢやないか。臺所から嗅つて來る香ひは、これや、てつきり、ママお得意の筍入りチャプスイだ。何時かのやうに、焦げついてくれなけれやいゝが……。

この時、門をはひつて來る一人の婦人がある。玄關の外で、呼鈴のボタンを探してゐるが、みつからないので、「御免下さいませ」と聲をかける。

甲吉 (三輪車をとめ、父に向ひ) 坊つちやんのとこの「ためや」だ。

念吉 何か御用ですか。

甲吉は、椽側から奥へ飛び込んで行く。

ため 旦那さまでいらつしやいますか、わたくし、その黒林のものでございますが、ちよつと、奥さまに……。

念吉 奥さんは、今、飯の用意をしておりますが、僕ぢやわかりませんか。

ため いえ、實は、お宅のベスのことで伺ひましたんですけれど……。

念吉 ベスのことですか。



妻の二見が、奥から玄關に出る。念吉は、椽側立つたまゝ、女たちの會話を聴いてゐる。

二見 失禮いたしました。黒林さんのお女中さんでしたね。そして、御用は……？

ため はい、實は、申上げにくいことでございますけれど、お宅のペスが、今日、宅の旦那さまのお靴を片一方咬へて行つたんでございますよ。あたくしの不注意からなんでございますけれど、若しや、こちらへ持つて来てはをりませんかと存じまして……。

二見 まあ、それは、それは、飛んだことをしましたね。今朝から、ちつとも見かけませんのですけれど、どんなお靴でせう。

ため 赤革の、かう、ポツポツの模様をついた、旦那さまが一番度々お召しになる編上なんでございますが……。

二見 それぢや、よく、氣をつけておきますわ。ほんとに御迷惑でしたね。そんな悪戯をするなんて、ちつとも存じませんのですから……。でも、おつしやつていたゞいてようござんした。これからのこともありますからね。何れ、どつちにしても、あたくし、御挨拶にあがりますけれど、奥さまによろしくおつしやつて頂戴ね。

ため では、どうぞ……。御免遊ばせ。

二見 どうも。御苦勞さま、あ、それから、甲吉が度々お邪魔に伺ひますんですつてね。

ため いゝえ……。

黒林家の女中が去つたあと 二見は、座敷に来て、念吉の顔を見る。

二見 お聞きになつて？

念吉 あゝ、聞いた。

二見 どうしませう。

念吉 それを、今、考へてるところだ。いくら犬でも、靴を片一方、食つちまふわけはあるまい。何處へ持つて行くかだが、この探素は、一寸困難だね。僕の靴が古くなつたからと思つて、代りを見つけて来るほどの忠犬でもなしね。

二見 辨償するつて云つても、向うちや氣持よく思はないでせう。

念吉 あの家が五千圓かゝつたといふんだから、穿いてる靴も十八圓ぢや利くまい。それより、近所を探してみることにしよう。いよいよ無かつたら、その時、なんとか始末をつけるさ。おい、甲吉君、君も一緒に來い。

彼は下駄をつゝかけて外に出る。甲吉はその後から、走つて従いて行く。

二見は、これも庭に降りて、椽の下、犬小屋の中、植込の間をのぞきまはり、その足で裏の方に廻る。何處かで鶏の啼く聲。



二見が、家をひと廻り廻つて、門のところへ出て來ると、表を酒屋の御用聞が通る。

二見 ちよつと、三良さん、あんた、うちの犬を、何處かで見なかつた？

三良 さあ、今日はと……。あゝ、今朝、何處かの鶏を追つかけまはしてるところを見ましたよ。幼稚園のそばでしたよ、たしか……。ゐなくなつたんですか？

二見 そんな時、靴を咬へてやしなかつた？

三良 靴ですか。さあ、咬へてないやうでしたよ。

二見 さう、ありがたう。あんた、さうして歩いて、靴が片一方落つこつてたら、拾つて來て頂戴ね。お駄賃をあげるから、……。赤革の、かう、ボツボツの模様のある、かなり上等の編上だから……。でも、少しぐらゐ違つてたつていゝわ。

三良 旦那ですか。

二見 男の靴よ。なんでもいゝから、落つこつてる靴は、みんな一度、うちへもつて來て見せて頂戴。

三良 畏こまりました。毎度ありがたう……。

御用聞が行つてしまふと、今度は、大串葉繪が、切花を手を持って通りかゝる。識るでもなく識らぬでもなき間柄とみえ、軽い會釋をしたまゝ行き過ぎようとする。

二見 (追ひ纏るやうにして)一寸、失禮でございますが、そこのお花のお師匠さまぢやいらつしやいませんか？

葉繪 さやうでございます。あたくし、大串葉繪でございます。

二見 あたくし、今里の家内でございます。始終お見かけしてゐながら、まだ御挨拶もいたしませんで……。お嬢さまが、ほんとにお可愛くつて……。

葉繪 どういたしまして、お宅の坊つちやまこそ、おとなしい、御利口さうな坊つちやまでいらつしやいますこと……。

二見 多分、ちよくちよくお邪魔に上がることゝ存じます。それから、子供ばかりでなく、宅の犬がまた、きつと、お庭を荒しますことでございます。

葉繪 とんだ御心配で……。どうぞ、ちつと、奥様も、お話しにいらしつて下さいませ。獨りもので、淋しく暮してをりますから……。 (花を見せながら) こんなことでも致してをりませんと、日が永うございまして……。

二見 結構でございますわ。(もぢもぢしながら)あう……だしぬけに妙なことをお願いいたしますけれど、若しや、お宅の裏にでも、古靴が片一方落ちてをりましたら、宅の犬が咬へて參つたんでございますから、一寸、お知らせ下さいませんでせうか。誠に相



濟みませんけれど……。

葉繪 それはまあ、お困りでいらつしやいませう。早速、調べてみることにいたします。ほんとに、どんなにお躰けがよくつても、犬つて申しますものはね。

二見 いゝえ、もう、野良犬同然な犬でございますから、なにをいたしますか……。

葉繪 では、人を待たせてございますから、これで……。

二見 お呼びとめして、ほんとに……。

兩人、丁寧にお辭儀をし合ふ。二見は、しばらくその後を見送つた後、家の中にはひる。

やがて、膳ごしらへをはじめ。そこへ、六つぐらゐの女の子の手を引いて、片倉州藏の

妻まつのが、この家の玄關口に立つ。

まつの 御免下さい。

二見 はい。

二見は玄關に出る。

二見 どうぞ、お開け下さい。

まつの (玄關の戸を開けるが、中にはひらない。にべのない挨拶) わたくし、その幼稚園のそばにゐるものでございますが、今日、お宅の犬が、宅で飼つてをります鶏を追つかけ

まはして、噛み殺してしまつたんでございますよ。すぐには死にませんでしたけれど、さきほどとうとう駄目になりました。宅では、餘所様のやうに卵を生ますために鶏を飼つてるんぢやございませんのです。これの遊び相手に二三羽飼つてみたんでございますけれど、毎日のやうにお宅の犬が追ひかけますんで、これが、そのたんびに騒ぎますんです。今日なんか、羽根を咬へられて、藻掻いてゐる様子を見ますと、これが、あたくしにしがみついて、狂ふやうに泣くぢやございませんか。鶏小屋へ入れておけばいゝとお思ひになるかも知れませんが、それでは、子供が、一緒に遊んでゐるといふ氣がいたしません。鶏の方でも、それはよくこれになつきまして、餌なんか手からたべるやうになりますし……。

この時、今里念吉は、甲吉をおぶつて、門をはひつて来る。玄關の人聲に氣づき、立ちどまる。

まつの (念吉の姿を見て、軽く腰をかゞめ、そのまゝ喋りつゞける) 兎も角、代りを買へばいいといふやうな鶏ではないのでございますから、ほんとに當惑してをりますんです。

念吉 お宅の鶏が見えないんですか。

まつの (突劍呑に) 見えないんぢやございません。現に、お宅の犬に噛み殺されたんで



ございますよ。

念吉 それは、それは……。

まつの かうして伺つたのは、別に、どうしていたゞかうつていふんぢやございません。できてしまつたことは、しかたがございませんからね。たゞ、これから、犬を繋いどいていたゞきたいんでございます。晝間だけでも、さうしといていたゞきませんと、鶏を庭で遊ばせることができませんですからね。卵を生ませるだけなら、小屋で飼へますけれど……さつきも申上げましたやうに……。

念吉 わかりました。誠に申わけありません。犬は繋いでおくことにします。これから、御迷惑はかけないつもりです。して、その死んだ鶏は、どうしませう。

まつの それや、もう、どうしていたゞかなくつてもよろしいんです。庭の隅へ、お墓でもこしらへて、末永く弔つてやるつもりでございますから……。

念吉 あなたの方はそれでいゝとして、僕の方は、それぢや困ります。犬を代りに殺してみたところではじまりませんし、辨償をするにも、金には代へられないとなると、一體、どうしたらいゝんですか。つまり、犬がわるいんだから、その犬に刑罰を與へるとおつしやるんですか。

まつの いゝえ、犬よりも、お宅の方でお氣をおつけになつて下さればよろしいんです。

念吉 なるほど、その御注意は有がたくお受けします。

二見 でも……それぢや、代りの鶏でも買つて差上げることにいたしませうか。ほんとに、あの犬には困つてしまひますわ。

まつの かう申しぢやなんです、この邊の鶏を飼つてらつしやるお家ぢや、みんなお宅の犬には困つていらつしやいますよ。わたくしのところばかりぢやないんですからね。いちいち、さうおつしやつていらつしやいませんでせうけれど、このお隣りの尾畑さんでも、大事になすつてらしたつたチャボが一羽、何時の間にかゝなくなつたんですつてね。多分お宅の犬だらうつて、さう云つてらつしやいましたよ。

二見 何時のことですか、それは……。

まつの つい、先達ですけれどね。——なにしろ、一寸、外へ出て御覽になればわかりますよ。あの犬が、毎日のやうに方々の鶏を追つかけまはしてゐることを、お宅では御存じないんですか知ら……。

二見 ちつとも存じませぬの。ほんとに、今日さういふことを伺はなければ、何時までも皆さんにお迷惑をかけるつもりでしたわね。(夫に向ひ) ペスは、その邊にゐませんで



したか。

念吉 ゐないよ。靴もないよ。甲吉が寝ちまつた。犬は、歸り次第、嚴重に縛りつけます。

二見 失禮ですが、どちら様でございませう。

まつの いゝえ、名前なんか申上げてても仕様がございません。どうか、それでは、今後のことをお願いいたします。

二見 かしこまりました。何れ、なんとかして御挨拶に伺ひます。こんなところで、御免下さいませ。

まつのの去つた後、念吉、黙つて玄關から上にあがる。

念古 (座敷に現れ) さ、おろしてくれ。

二見 (座蒲團の上に甲吉を寝かせ) 今頃寝てくれちや困りますわ。

念吉 よつぽど草臥れたんだ。それに近所を一軒々々尋ねて歩いたんだからね。空地といふ空地も見て歩いた。ところで、靴つていふものは、割合落ちてないね。しかし、なかなか思ひ掛けないものが棄てゝあるよ。

二見 (子供に掛蒲團をかけ終り) 靴も靴ですけれど、今の話はどうしませうね。

念吉 向うの云ふとほりにするほかないさ。鎖は、何處へしまひ込んだかなあ……。

二見 それほどにして飼つておく犬ですか知ら……。湧山さんがあんまり御自慢をなさるもんで、子供が生れたら一匹下さいつて、なんの氣なしに云つてしまつたんですわ。初めのうちは甲吉も悦びましたけれど、近頃では、丸で見むきもしませんよ。かまつてやらないせいもあるでせうけれど、毛は汚れ放題、蟲はたかり放題で、その上、意氣地がないことゝ來たら、餘所の犬を見さへすれば、どんな犬にでも尻尾を垂れちまつて、いきなり降參の恰好ですもの。連れて歩くんだつて、こつちが羞かしいくらゐですわ。

念吉 君はさういふ風に、さも自慢らしくベスの悪口を云ふが、そんなら僕が警察へ引渡さうつて云つた時、頑強に反對したのは誰だい。一步譲つて獣醫にモルヒネを注射して貰はうと提議しても、君は、僕の前に立ち塞つて、如何にベスが泥棒の用心になるかを力説した。

二見 ですから、何處かで貰つてくれゝば、すぐにでもやりますわ。

念吉 あの犬をかい。いきなり降參の恰好をする犬をかい。

二見 それや、仕込みやうで、どうにでもなりますわ。飼主次第ですわ。

念吉 よし、假りに僕の仕込方が優柔不斷であつたとしよう。それならそれで、せめて、



見場<sup>みば</sup>だけでも、もうちつと好くなくつちやね。なるほど、あいつには、面白いところがある。しかし、これは飼つてみないとわからない。僕は別段、あの犬に愛想をつかして殺してしまはうと思つたわけぢやない。こんな飼ひ方をするくらゐなら、飼つておかない方がいゝと思つたまでだ。あの犬を餘所へやることは、流石に僕も氣がつかなかつたよ。あ、歸つて来た。ベス！ ベス！（彼はいきなり立上がり、椽側に出て犬を呼ぶ、それから、下駄を穿いて庭傳ひに犬をつかまへに行く）ベス！ こゝへ来い。（やがて、犬の首環をつかまへて小屋の前へ連れて来る）こら、ベス！ もうちつとほかに遊び方はないかい。靴が面白けれや、おれの靴があるぢやないか。餘所の鶏なんか追つかけずに、そろそろ女友達でも作つたらどうだ。

二見 （チャブ臺の前にすわり）そんな氣の利いたことができるもんですか。

念吉 おい、臺所の棚をみてくれ。鎖はあそこへ置いた筈だ。

二見 夜は何處へも行きやしませんよ。

念吉 いや、朝、いはかれるのを待つてやしまい。何んでもいゝから持つて来てくれ。

二見 （臺所から鎖を持つて来る）あとでよく手を洗つて下さいね。

念吉 氣の毒だが辛抱しろ。そのうちにまたいゝこともあるだらう。

彼は犬を縛り終ると、膳に向ふ。箸を取上げる。すると、その時、百瀬鬼骨が半死半生の牝鶏を小脇にかゝへて玄關に現れる。

鬼骨 御免！ お留守ですか？

二見 二見が取次に出る。

二見 どうぞ、お開け下さい。

鬼骨 （玄關の戸を開け）わたくしは、ついそこをります百瀬ですが、實は、御迷惑な御相談に上がりました。

二見 はあ、まあ、おはひり下さいませ。

鬼骨 いえ、こゝで結構です。わたくしは、昨年、失職以來、妻子を國元へ歸し、只今、獨りで、その家を借りてをるんですが、なにしろ暇なもんですから、それと、朝食の卵ぐらゐは買はなくてもすむやうに、コーチンを三羽ばかり飼ひましてね。

二見 はあ。

鬼骨 まあ、ぼつぼつやつてをるんですが、どうも、生憎お隣が大家さんでしてな。大串葉繪といふ花の師匠があらませう。家賃を半年も溜めて、毎日、顔をつき合はせるのはあんまりいゝ氣持ちやありませんよ。目下、それとなく立退きを命ぜられてゐるやう



なわけです……。ついてはです。なに、なんでもないことですが、お宅の犬に噛みつかれてこの通りふいふいになつてゐる鶏をですな、若し、これでくたばるやうなことがありましたら、一つ、お買ひ取りを願ひたい、といふ譯なんです。なほ、充分、手當はしてみます。もち直せば文句はありません。それから、お宅の犬ですがな。かまはなけれや、わたしが、一つ、鶏を追つかけないやうに仕込んであげませう。これや、わけありません。鶏と一緒に遊ばせておけばいゝんです。わたしが、そばについてましてね。叱りながら馴らすんです。なにしろ、暇でぶらぶらしてゐるんですから……。

二見 さやうでございますか。(奥に向ひ) ねえ、パパ……。

さつきから、箸を置いて玄關の話を聴いてゐた念吉は、この時、起ち上つて出て行く。

念吉 やあ、僕、今里です。お話は伺ひました。鶏のことは承知しました。それから、犬の方は、お言葉に甘へて、さうしていただくことにませう。

二見 ほんとに、さうしていただければ……。

念吉 しかし、その鶏は、大分弱つてるぢやありませんか。とても駄目でせう。

鬼骨 まあ、できるだけ介抱はしてみます。こちらにも御迷惑をかけないで済めば、これに越したことはないんですから……。

念吉 いや、どうも……。

二見 お金で済むことなら、なんでもございませぬけれど……。ねえ、パパ、それより、あゝおつしやつて下さるんだから、一層ベスを差上げてしまつたらどうでせう。犬はお好きでいらつしやいますか。

鬼骨 (聞こえないふりをして) 今、そこで話を聞いたんですが、大分、この近邊を荒したらしいですね。犬のお蔭で、お宅の評判はともわるいですよ。ハ、ハ、ハ、ハ。どれ、犬を兎も角、お預りして行きませう。今、をりますか。

念吉 ゐるにはゐますが、まだ夕飯も食はしてありませんから、後程、僕が連れて伺ひます。

鬼骨 それぢや、その夕食も一緒にお預りして行きませう。味噌汁の残りでも、魚の骨でもかまひません。容れ物はありませう。

二見 でも、あんまり汚れてゐて……。

念吉 外側だけ拭いたらいゝぢやないか。

二人は、それぞれ、犬の夕食と容れ物の心配をしはじめ。

やがて、念吉は、犬を引張つて来る。二見は、古洗面器の中へ何か知らを容れて持つて来る。



二見　こんなものでよろしうございませうか。生憎、なんにもございませぬのよ。  
念吉　ほんとだね。なんだ、もう少し、身のついたところははないのか。  
鬼骨　（犬とその食事を受け取り）なに、かまやしませんよ、わたしが食べるんぢやないか  
ら。

彼は、そのまま、悠々と門を出て行く。

## 第二場

前と同じ場面。翌朝。

今里念吉は、座敷で外出の用意をしてゐる。二見は、その側で、ネクタイの皺を伸ばしてゐる。もう洋服に着かへた甲吉は、庭で三輪車を乗り廻してゐる。

二見　また泥をつけちやいやですよ。

甲吉　パパ、自動車で行くんだらう。

念吉　馬鹿云つちやいかんよ。急ぐ用事でなければ、自動車なんかへ乗るもんぢやない。

甲吉　また早く行かないと、ライオンが牛肉をたべるとこ見られないぢやないか。

二見　上野なら、電車だつて、おんなじ時間ですよ。それより、こゝへいらつしやい。

はなをかんであげるから……。

甲吉　つままないな。節約しようと思つて、あんなこと云つてやがらあ。



二見 やがらあたあ、なんです。さうよ、儉約よ。儉約はいゝことなんですよ。

甲吉 いゝことなら、はじめからさう云やいゝぢやないか。

念吉 こいつ、なかなかやるわい。さ、墓口は……？

この時、表から、百瀬鬼骨が、死んだ牝鶏を片手にぶら下げて現れる。座敷の方をのぞき込んで、つかつかと庭へはひつて来る。

鬼骨 こゝから御免なさい。いや、たうとう参つちましたよ。いろいろ手を盡してみたんですが、駄目でした。それぢや、お迷惑でも、これを一圓五十錢で買つて下さい。

二見 でも、さうなつたのを頂戴しても仕方がございせんから、それはそれで、よろしいやうにしていたゞいて……。ねえ、パパ、お金はお金で別に取つていたゞけばよろしいでせう。

念吉 無論さうさ。

鬼骨 いや、それやいけません。これでも、つぶしにすれや、いくらかになるんですからね。たゞ、わたしは、代りの鶏を一羽買はうと思ひましてね。

念吉 ですから、その肉は、よろしかつたら、あなたがおあがりになつて下さい。

二見 ほんとですわ。うちの犬が殺した鶏なんぞ、こちらではいたゞけませんわ。

鬼骨 さうですか。それなら仕方ありません。しかし、さうなると、お金はいたゞきにくだすな。

念吉 いえ、いえ、それは別問題です。ぢや、どうか、これで……一圓五十錢……。

鬼骨 弱つたなあ。一體、かういふ問題は、お互に注意しさへすれば、起さずすむ問題なんですからね。わたしがこのお金をいたゞいて、死んだ鶏の肉を食ふとなると、損害を蒙るのは、わたしの方でなくつて、寧ろ、あなたの方ですからね。以後、誰彼となく、死んだ鶏をもつて、あなたの方のところに押しかけて来ないもんでもない。それは戯談だが、お宅のペスは、うちの鶏と遊んでゐますよ。嘴で鼻の頭をつツ突かれて、あとすざりをしてゐますよ。可愛いゝもんです。わたしもね、年に三度は引越をする男ですが、何處へ行つても、近所といふものが五月蠅くていけない。こつちばかりぢやない、向うでもきつとさう思つてゐる。それが、いろんな機會に、いろんな形で現れるんです。わたしは、これで新聞記者の成れの果です。社會生活といふものに、人一倍關心をもつてゐる。無論、わたし一人の腕ではどうにもなりやしません、昨夜、つくづく考へました。そして、かういふことを思ひついたので。この近所一區劃が、假りに二十軒あるとしませう。その二十軒が、それぞれ違つた様式の生活をしてゐる。それはまあいゝと



して、めいめいが、少しも隣人のために計るといふことをしない。これは間違つてゐる。當り障りはありますが、犬なんかのこともです。自分の家の鶏が追つかけられてゐるのを見たら、他所の家の鶏のことを考へて、早く、犬の飼主へそのことを知らせるやうにすれば、面倒は起らない。面倒が起つても二軒の間だけですむわけです。蔭で愚圖々々不平を云ふ、それも、悪戯をした犬のことだけならいゝが、飼主の人身攻撃に互るやうなことを、あつちこつちへ觸れ歩く。これは怪しからんです。そこでゝすな。わたしの考へたといふのは、お互が胸襟を披いて、ひとつ、めいめいの苦情なり、註文なりを云ひ合ふ會合を催してゝすね、改善すべきことは改善する、特別の事情は特別の事情で諒解を求めるといふやうにすればです、お互に、今後、明るく、のびのびと生活ができやしないかと思ふ。加何です、異議がおりますか。

念吉 結果がよければいゝですが……。

二見 氣まづい思ひをするだけぢやございませんか知ら……。

鬼骨 大丈夫です。その代り見榮と利己主義を棄てなければいけません。わたしにお委せなさい。これから、すつと廻つて、意見を集めてみます。同じ近所の噂を聞くにしても、あそこの旦那つていふのは、奥さんが女學生時代の英語の先生で、學校にゐる頃か

ら怪しかつたんだとか……。(念吉と二見は、思はず顔を見合はせる)旦那も不愛想だが、奥さんときたら、どこが偉いのか、人に遇つても自分の方から先へお辭儀をした例がないとか、向うの子供が遊びに来れば、まあお菓子だけはおいしさうなのをと思つてやつてゐるのに、こつちの子供が向うへ行くと、しけたお煎餅しか出さないとか……。

二見 あらまあ、そんな……。たつた一度きりですよ。随分ですわね。

鬼骨 さういふ噂は全く聞きづらいですからなあ。

二見 そんなこと云ふなら、こつちだつて云ひますわ。まだろくに齒もかたまらない宅の子供に正月のおかちんの揚げたのなんか食べさせるのは、何處の家でせうね。そんなことなら、まだようござんすわ。少し發育が遅れて、年の割に無邪氣なのをいゝことにして、人のとこの食事の獻立まで根掘り葉掘り訊いたりなんかするつていふのは何處の奥さんでせうね。

念吉 もういゝ、ママ、こゝでそんなことを云つたつてしようがないぢやないか。それ

ぢや、僕は、一寸出かけて來ますから……。また何れゆつくり……。

鬼骨 お出掛けですか。今日は日曜で、お休みでせう。それぢや、お手間は取らせません。ぢき、話をきめて來ます。



念吉

でも……。

鬼骨

いや、なんでもありません。すぐ歸つて來ます。

彼は、そこに置いてある一圓五十錢を引渡ひ、そのまゝあたふたと出て行く。

二見

(ぐつたりと、そこに坐り) あたし、いやらなつちやふわ。(泣く)

念吉

(甲吉の姿が見えないので) おい、甲吉君、遠くへ行くんぢやないよ。今すぐ御用がすむからね。それから、ねえ、ママ、せめて君だけはしつかりしてゐてくれ。甲吉は甲吉で、年が頭を置いてきぼりにするし、ペスはペスで、家にあるもんだけぢや氣に入らんといふし、その上、君が、僕の黙つてゐたいことをみんな喋つちまつちや、僕は立つ瀬がないよ。甲吉君！ 危い、そんなことしちや……。 (なるほど、甲吉が、庭の隅で三輪車の曲乗りをし損ふ) だがね、ママ、僕たちはこれまで、二人の生活だけを愉しんでゐればよかつた。(ピアノの練習曲が聞えて來る) これからは、さうは行かないよ。世間との交渉がだんだん複雑になる。周囲のことをいちいち氣にする必要はないが、こつちも相當、準備をしてかゝらなければ駄目だよ。

二見

そんなこと、わかつてますわ。

念吉

わかつてれば、それでいゝさ。鼻から涙が落ちてら。

二見

いゝんですよ。(拭かうとしない)

念吉

(椽側に腰をおろし) お隣りのお嬢さんも、早くピアノが上手になつてくれるといゝなあ。おい、こら、甲吉君、そんな無理なことをしたつて駄目だよ。それより、こゝへ來給へ。パパがまた、試験をしてやる。

甲吉君はしぶしぶ父親のそばへ行く。

念吉

(甲吉の肩を両手で抑へ) 甲吉君のパパは、なんていふ名前？

甲吉

今里念吉。

念吉

ママは？

甲吉

今里二見。

念吉

パパの商賣は？

甲吉

商賣つて？

念吉

商賣つていふのはね、どうしてお金を儲けるかつていふことさ。

甲吉

ママに貰ふんだ。

念吉

さうか。そのママのお金は、何處からはひつて來る？

甲吉

袋へ入れてパパがもつて來るよ。



念吉 その袋へはひつたお金は、パパが何處から持つて来る？

甲吉 知らないやあ。

念吉 それはね、パパが毎日學校で英語を教へて、そのお駄賃に貰ふんだ。

甲吉 毎日貰ふの？

念吉 うゝん、一と月目毎に貰ふんだ。幾ら貰ふかといふと……。

二見 およしなさいよ、そんなこと教へるの。

念吉 どうして？ 教へた方がいゝよ。

二見 また近所がうるさいぢやありませんか。

念吉 なにがうるさい。幾ら貰つてるかと云ふと……。

二見 およしなさいつてば……。そんなこと、子供におつしやるなら、あたし、この家にやめせんよ。

念吉 また引越すのか。

二見 さうぢやありませんよ。あたし、一人で出て行きますよ。

念吉 あゝ、さうか。そいぢや、よさう。いゝか、甲吉君、ママがあゝいふから、幾らだといふことは教へないが、パパは決してお金持ちぢやない。君は、大きくなつたら、働

いて、自分で御飯をたべて行かなければならん。自分で着物も買はなければならん。

甲吉 肝油ドロツプも自分で買ふの？

念吉 さうさ。ではね、君は、大きくなつたら、なんになる？

甲吉 こないだ、ケイちゃんとの小母さんも、さう云つて訊いたよ。

念吉 なんて返事をした。

甲吉 黙つてゝやつた。さうしたら、ケイちゃんがそばから、屑屋になるんだらうつて云つたよ。

念吉 どうして？

甲吉 だつて、屑屋が通るたんびに、うちのママが「屑屋さん」つて呼ぶんだもの。みんな知つてるよ。

二見 それはね、甲ちゃん、うちぢや、いろんな塚づめのものを使ふでせう。だから、すぐに空塚がたまるのよ。それと、パパが外國の新聞をいくつも……。

念吉 うん、だから、いゝさ。

二見 なんていふ子供たちでせうね。

念吉 屑屋になるつて云はれて、君は、口惜しかつたか？



甲吉 馴れてるから平氣だい。

念吉 初めは癪にさわつたか？

甲吉 ほんとに、僕、なんになるの？

念吉 君の好きなものになるさ。屑屋だつてかまはないよ。かまはないどころぢやない。さつきママが云つたとほり、空堀や古新聞がうんと溜つて御覽。どこの家でも始末に困る。埃のたまつた空堀が、ずらりと臺所の隅に並んでゐたり、蟲のついた古新聞が、押入の中へぎつしりつまつてゐたりすると、第一、からだによくない。次に、家の中が亂雑になる。第三に、無駄だ。堀や新聞は、ほかへもつて行けば役に立つもんなんだ。屑屋がゐてくれなければどうすることもできない。屑屋は、乞食とは違ふ。ちやんとお金を出して、そいつを買つてつてくれるんだ。だから、屑屋つていふものは、四ついゝことをしてゐるわけだ。第一に……。

二見 (笑ひながら) 甲ちゃん、パパの云ふことなんか聽かないで、こつちへいらつしやい。ママがいゝお話をしてあげるから。

甲吉 動物園見に行かないの。

二見 パパの御用がすんでから……。それまで上へ上がつてらつしやい。帽子はどこへ

脱いだの。

念吉 (手に持つた甲吉の帽子を出し) こゝへ脱いだ。僕は、こいつに學問を仕込むことは諦めた。だから、學校へなんかはひりたがらないうちに、實地の職業教育を受けさせようと思ふんだ。それには、今から、學問尊重の風を養つてはならない。また、所謂立身出世の夢をみさしてはならないと思ふ。君も、そのつもりでゐてくれ。

二見 これで、まだどうなるかわかるもんですか。(しなだれかゝる甲吉を、がばふやうに抱き締める)

この時、郵便配達がやつて来る。

配達 今里さん、集金郵便です。

念吉 どちら、こゝへくれ給へ。

配達 (庭へはひつて来る)

念吉 校友會費を取りに來たよ。

二見 何處んです。

念吉 君の分だよ。

二見 明後日來て頂戴な。



配達 明後日つていふなあ、一昨日のこつてすか。もうこれで二度目ですからね。よござんす。返してやりませう。

二見 ちよつと待つて……。何時かのはあんだだつたのね。それぢや、パパ、そつから三圓出しといて下さいな。

念吉 (訝しげに) こつちから……？ 僕んとなつからかい。よし来た。はい、三圓……。郵便配達去る。

念吉 四圓八十錢から四圓五十錢引くと三十錢……。三十錢ぢや、電車にも乗れないや。

二見 甲吉は、丁度、眠つちまいましたわ。

念吉 また眠つたのか。待ちくたびれたな。(間)君、隣へ行つて、あやまつて来い。

二見 だつて、鶏がゐなくなつたから、ベスのせいだとは限りませんわ。猫だつてなんだつてゐるんですもの。

念吉 ベスのせいだと思つてるんだから、あやまつて来い。

二見 いやですよ。お隣の犬だつて、何時かのやうなことがあつたんですわ。こつちは、それを黙つてるんですわ。

念吉 しかし、覚えてだけはゐるか。

甲吉 (嚙言のやうに) パパ、動物園はまだ遠いの？

念吉 いや、もうぢきだ。そうら、向うに門が見える。象の哮なき聲が聞えるだらう。まだ起きないでい。

二見 ほんとだわ、ペリカンも啼ないてるわ。眠りながら笑つてますよ。

念吉 O! miserable of happy!

甲吉 (何かむにやむにや云ふ)

念吉 なんて云つてる？

二見 ライオン、ライオンですつて……。

念吉 さうだ、ライオンだ。ライオンが牛肉をたべてる。ライオンは、小便をひつかけるから、そばへ寄るなと書いてある。これは滑稽だ。檻の中へ入れられた猛獣の悲哀だ。これでも昔は、阿弗利加の沙漠で、縞馬の腹を引裂いてゐたんだ。パパは何時か、佛蘭西の詩人の書いた、獅子と虎との闘ひの詩を読んだことがある。無論、獅子が勝つた。河の水が、虎の血で、眞赤に染まるところが書いてあつた。甲吉君は、ある勇敢な探検家が、ピストル一挺で大きなライオンを撃ち止めた話を知つてるかい？ その探検家は、森の中で、不意に疊一疊敷ぐらゐのライオンに出くわしたんだ。鐵砲を肩から外す暇が



ない。ライオンは、もう大きな口をあけて、眼の前五六歩のところに迫つてゐる。やうやく、ポケットの中へ手をいれたと思ふ瞬間、ライオンは、後脚を蹴つて、躍りかゝつた。探検家の片手が、ライオンの口へはひつた。グワン！

一人の男の子が庭へはひつて来る。

念吉 甲吉君は今、眠てるよ。

男の子 遊びに来たんぢやないよ。手紙を持って来たんだよ。

念吉 何の手紙……？

男の子 その小父さんに頼まれたんだ。

念吉 (手紙を受け取り、封を開く) 回状だね。なんだ、これや……。 (読み上げる)

- 一、近隣の平和親善を目的とする一夕の會合を催したく、奮つて御出席を希望します。
- 一、會合の時刻は、本日午後七時。
- 一、場所は、八〇二番地今里念吉氏方庭園。
- 一、會費なし。

發起人 百瀬鬼骨 多胡鶴人

二見 なに、それは……。

念吉 かういふもんだ。八〇二番地今里念吉氏方庭園か……。この庭園のことだらうな。



第三場

同じ場面。夕刻。

今里念吉は、椽側を行つたり來たりしてゐる。二見は、鏡臺に向つて化粧をしてゐる。甲吉は、紙で折つた胃をかぶり、帯にハタキを差し、蚊にかまれた脚を搔いてゐる。すると、一人の男が、門前に來て立ち止る。中をのぞき込む。陸軍歩兵大尉島貫である。そこへ、また、一人やつて來る。興信所所員片倉州藏である。何かこそ話をする。途方に暮れたやうな風をする。そこへ、今度は、三人連れの學生風の男がやつて來る。平大野球部選手越水とその仲間である。念吉は、刻々數を増す敵勢に、孤城の運命を案ずる如く、椽側の端に仁王立となり、眈を決して門外を睨んでゐる。やがて、もう一人、續いて二三人。念吉は、肩で呼吸をしはじめる。

念吉　おい、ママ、君は、今のうち、甲吉を連れて、買物にでもなんでも出掛け給へ。  
二見　(夫の只ならぬ様子に、これも椽側へ出て外を見る。今更のやうに驚く。が) いゝえ、あたしも家にゐますわ。パパ一人を見殺しにはできませんわ。女ながらも、飽くまで闘つてみせますわ。

念吉　ナイフを貸せ、ナイフを……。

二見　ナイフは學校へ置いてらしたんでせう。

念吉　そいぢや、火箸でもいい。長いやつを貸せ。

が、もう遅い。禿頭の隠居多胡鶴人を先頭に、門外の群集はぞろぞろと庭の中に闖入する。

念吉は、思はず四五歩、後にさがる。二見と甲吉は、座敷の隅に追ひやられる。

多胡　大分お揃ひになつたやうですから、ひとつ……。こちらからで、よろしいんですかッ。

念吉　(黙つて身構へる)

多胡　わたくしは、お向ひの多胡でございます。御無沙汰をいたしてをります。今日はまた、とんだお厄介で……。さ、みなさん、多勢ですから、なるほど露天の方がいゝでせう。わたくしは、年寄ですから、御免下さい。(彼はさう云つて、一人、椽側に腰をかける)



島貫 自分は、突然で、よく御趣旨がわからないんでありますが……あ、自分は、参謀本部に勤めてをるかういふもんであります。(名刺を出す)

念吉 (油断を見せず、その名刺を受け取る)

越水 僕は、名刺を持ちませんが、その平大野球部の合宿所にゐる越水といふもんで。これが、クマソ、そつちが、ヤモリです。どうせ、ほんとの名前を云つたつてしよ  
うがねえや。

州藏 わたくしは、昨日家内が伺つた筈ですが、幼稚園のそばに住んでをります片倉で  
ございます。今日は是非出ろといふお話なもんでございますから、もうちき客が来るこ  
とになつてをるんでございますが、ちよつと外して参りましたやうな次第で……。犬は  
どちらへか参りましたんですか。(犬小屋のまはりを探す)

後から後から、門をはひつて来るものがある。最後に、百瀬鬼骨が、大串葉繪と共に現れ  
る。

鬼骨 女主人は女が出ることになつてゐます。さあ、どうぞ……。そんな遠慮をしてち  
やいけません。やあ、みなさん、遅くなりました。二十三戸のうち、七戸は差支があつ  
て、今回は缺席、残り十六戸の方々がお集り下さいました。有望な成績です。中には、

一戸で三人まで御出席下さつた方がある。發起者として感謝する次第です。では、わた  
しから、もう一度、この會合の趣旨を申し上げます。(咳拂ひをする) え、最初に、この  
會合を思ひ立ちました動機についてお話をすれば、實は、今日、會合の場所を御提供願  
つた當今里家の愛犬ベスがであります、不圖した迷ひから、近所の鶏を追ひまはすやう  
になつた。これはであります、獵犬などにはよくあることでありまして、獵犬でなくて  
も、犬の青年期と申しますか、つまり、元氣旺盛な時代には、何か生き物を弄びたいと  
いふ慾望が盛んである。そこで鶏を追つかけた。追つかけてみると面白い。つひ、無我  
夢中で食ひつく。これはたまたま、人間にもその例があることでありまして、深く咎む  
べきではない。しかし、食ひつかれた鶏が、そのために一命を墜すといふことになる、  
問題が面倒であります。今里家の愛犬ベスは、遺憾ながら、この種の問題を惹き起した  
のであります。奥さん、水を一杯頂戴。

二見は、しかたなしに、水をコップに汲んで差出す。もう、外は眞暗である。だんだん椽  
側に腰をおろすものが出来て来る。

鬼骨 恐れ入ります。え、と、うん、この種の問題を再三惹き起したのであります。折  
角思ふところあつて飼つてゐる鶏を、むさむさ犬に噛み殺されるやうでは、飼つてゐる



方でも迷惑でありますし、それにまたいちいち辨償をさせられては犬の飼主も堪らない。そこはお互である。めいめい注意をしなくてはならない。その方法は、いくらでもあるんであります。

片倉　ちよつと、お話中ですが、今の鶏のことでございますがね。

鬼骨　お待ちなさい、あとで質問を許します。そこで、これは單に金銭で解決のつく問題であります、中には、さうでない問題がいくらかもある。

片倉　實は、その、手前共では……。

鬼骨　黙つて……。さうでない問題がいくらかもある。隣近所が、お互に、知らず知らず迷惑をかけ、それをまた、雙方苦情も云へず、蔭でぶつぶつ云つてゐるといふやうな場合が度々ある。これがなかなか、恐ろしい事であります。あらぬ噂となり、不公平な評判となり、嫉視反目、この界限、住むに堪えずといふことになる。かくの如きは、お互文明人の慎み戒むべきことであるのみならず、さなきだに世智辛き時代を、一層暗黒に導くものだと考へるのであります、これはひとつ、われわれの力で、われわれの恵まれた智力で、なんとか解決をしなければならぬと、不肖、私が、僭越を顧みず、こゝに、近隣平和會議の提案をいたした次第であります。

拍手をするものがある。念吉は、何時の間にか椽側の柱にもたれて、話を傾聴してゐる。

鬼骨　つきましては、この會議に列席する代表の範圍であります、これは私の獨斷で、當今里家を中心とする一區劃に限りました。御承知の通り、この界限は、もと水田を埋め立てた土地でありまして、最近家が建つたばかりの、云はゞオアシスの如き孤立部落であります。地所は大部分、あそこに見えますあの森、蒼々たる千古不伐の森に取巻かれた麥倉一家の所有であります、昔日の水呑百姓は、今日、娘を女子大學に通はせ、妾に麻雀俱樂部をさせてゐる。

また拍手が起る。念吉はしゃがんでしまふ。

鬼骨　われわれは、不平を數へればきりが無い。先づ、小さな不平から片づけて行きませう。如何です、議事の進行を計るために議長を指名しては……。〔自分でやれ〕といふ聲がかかる。皆さん、異議ありませんか。なければ、わたしがやります。それではと、お名前をいちいち覚えてをりませんから、そちらから順々に自己紹介をなすつた上で、議題となるべき件を御提出願ふことにませう。(椽側に上り、二見に向ひ)奥さん、ちよつと、机と紙と鉛筆を拜借。

二見　パパ、紙はどんなのにませう。(彼女はさう云つて、自分の机を椽側に運んで来る。



この間に、人々は椽側へぎつしり並んで腰をおろす)

鬼骨 答案紙の残りかなんかありませんか。

二見 そんなんでなく、ちゃんとした紙がございます。(彼女は、罨紙を一帖もつて来る)

州藏 少し急ぎますから、手前から先に申上げます。手前は、片倉と申すもんです。先程、百瀬さんからお話の御座いました犬の被害者の一人でございます。この席で申上げるのも如何かと存じますが、一概に鶏を飼ふと申しますと、なにかかう、慾得でやつてゐるやうに聞えますが、手前どもでは、その……。

鬼骨 なるべく簡単に願ひます。結論を先におつしやつて頂けませんか。

州藏 はい。結論は、つまり、どなた様でも、犬は、なるべく、鎖に繋いどいていたゞきたいと思ひますので、これは、なに、鶏ばかりでなく、夜道などいたしますと、不意に曲り角で吠えつかれるやうなことがございまして、それにまた……。

鬼骨 すると、何處の家でも、犬は鎖に繋いで置けといふ提案ですね。

州藏 はい。しかし、まあ、特に、鶏を追ひかけますやうな犬は……。

鬼骨 では、鶏を追ふ犬はと限りますか？

州藏 みなさん、如何でございませう。

聲 わたしのところには、鶏も犬も飼つてありますが、犬を鎖へ繋ぐといふことは、絶對に反對です。今里さんにはお氣の毒ですが、これは、現行犯に基いて、危険な犬だけを適宜に處分すればいゝと考へます。

鬼骨 あなたは、尾畑さんでしたな。

尾畑 さうです。

鬼骨 では、尾畑君の提議に賛成の御方は恐れ入りますが……。

二見 (膝を乗り出し) それぢや、あたくしにも云はしていただきます。

念吉 おい、ママ。

鬼骨 なにか、意見がおありですか。

二見 人のうちの犬のことは、平氣でそんなことがおつしやれるでせうけれど、お宅の犬が、先達、これの晩のおかすにわざわざ買つといた平目の切身を、うつかりしてる間に銜へてつたことは御存じでございますまい。さういふ犬も、鎖で繋いどいていただきますうございますわ。それから、片倉さんとやらに申上げますけど……。

鬼骨 反對意見もあるやうですから、こゝで採決を取ることにします。先づ、尾畑君の意見に賛成の御方は、手を舉げて下さい。よく見えませんから、しつかり舉げて下さい。



(闇をすかしながら) 一、二、三、四、五、六、七……はい。では、今里夫人の提案、即ち、鶏のみならず、魚の切目を銜へて行つた犬をも含める意見に賛成の方は……？。(見廻して) 奥さんお一人ですか。その他の方は、どういふ御意見ですか。(誰も答へない) どんな犬でも、鎖に繋ぐといふことは絶対に不賛成だとおつしやるんですか。(「不賛成だ」と答へるものがある) それぢや、その方は手を舉げて下さい。(他の全部が手を舉げる、念吉もその一人である。) 一、二、三、四、五、六、七、八……はい。では、尾畑案、及び、今里夫人案は否決されました。(拍手) 次は、どなたですか。

州藏 手前、少し急ぎますんですが、もう引取りましてもよろしうございませうか。

鬼骨 いけません。次は、それぢや、多胡さん……。

多胡 わたくしは隠居の分際で、御近所への不平など毛頭ございせんが、あの本道からこちらへ曲ります道でございませう。あの道がどうも、雨降りなどには……。

鬼骨 お待ちなさい。それは、地主か役場へ掛け合ひませう。では、お次の黒林さん……。

黒林 先程、犬の問題がでしたが、議長に御注意申上げたいことがある。最初、片倉さんが提議されたのは、飼犬は悉く鎖に繋ぐべしといふことであつた。議長は、何故に、

先づ、この提案に對して採決を求められなかつたか。重大な手落であると思ふ。今里夫人の御意見も、恐らく、これに含めらるべきものだと考へるが、如何です。

鬼骨 では、今の黒林案に賛成の方は……？。(「おれや、どつちでもいゝや」といふものがある) 一、二、三、四、五、六、七……否決であります。

黒林 手を幾度も舉げる人がある。

鬼骨 否決であります。えゝと、次は、島貫君……。

島貫 自分は、外に不満はありませんが、ピアノの練習は時間を決めてやつていたときたい。出来れば晝間だけといふことに願ひたいのであります。それから、序に申上げて置きますが、何處かの犬が、先達、拙宅の掃溜へ、古靴を片一方銜へておいて行きました。もう五六度底を替へたやうな靴でしたから、そのまゝにしておきましたが、みなさん、玄關の履物なんかは、御用心なさる方がいゝと思ひます。これで終り。

二見 あの、その靴は、若しや、赤革の、ボツボツの模様のある編上ぢやございませんでしたか。

島貫 そのボツボツも、泥でおほかたみえないくらゐでした。

二見 あゝ、それぢや、黒林さんのお宅のですわ。



黒林 いゝや、なに、わたしのところは、出て来ました。

二見 まあ、それで安心いたしました。ほんとに安心いたしましたわ。(鬼骨に)では、どうぞ……。みなさん、お茶も差上げなくつてよろしくございませうか。

鬼骨 なに、結構です。それでは、「ピアノは時間を決めて練習すべし」この案に賛成の方は……？ (八人手を挙げる。二見は挙げるが念吉は挙げない) 多数と認めます。では、心當りのお方はさう實行なさるやうに……。次は、越水君。

越水 畑に肥料(こやし)をやるのはいゝが、臭くつてやりきれない。あれをなんとかして貰へんですか。僕んとは、前うしろに畑があるんだから閉口なんだ。なあ、おいクマソ……。

クマソ どんな畑かと思へや、茶葉が二行半ばかりと……。

鬼骨 シツ！ 畑には臭ひのしない肥料(ひやし)をやるといふ案に賛成の方は……？ (越水とその仲間二人だけ手を挙げる)

越水 これだけか。鼻の悪い奴ばかり揃つてやがらあ。

鬼骨 臭いのが君達んとこへは、はいりいゝんだらう。

越水 なに？ 今の言葉を取消せ。取消さんか？

鬼骨 只今の失言は取消します。次は……。

越水 まだあるぞ。おれたちは、晝間みんな練習に出るもんだから、近所の餓鬼共が其

處へ上り込んで、菓子箱でもなんでも空にしちまふんだ。親たち、ちつと取締つてくれ。

多胡 家を明けるときは、鍵をかけて出るんですよ。第一、用心がわるいですぜ。

越水 別に取られるやうなものも、置いてないからさ。

多胡 なにを云つてるのかわけがわからん。

越水 禿、黙れ。てめえの孫も、その一人ぢやねえか。

多胡 生憎、孫は北海道にゐる。菓子をつまむなあ、子供と限るまい。

越水 てめえか。

多胡 さ、議長、議事を進行させたらどうです。

鬼骨 それでは、只今の議案は、「家を明ける時は鍵をかけること」でしたな。

越水 さうぢやない。

鬼骨 賛成の方は……？ (誰も手を挙げない) おや、賛成の方はありませんか。

多胡 そんなことは決議するまでもないでせう。鍵をかけないのが馬鹿なんだから……。

越水 なにを！ こいつ、殴れ！

逃げようとする多胡を引捕へ、野球部選手三人は争つて拳固をふるふ。この四人の一塊が、



採みつ採まれつ門外に出るのを待つて、

鬼骨 守衛がをりませんので、遺憾ながら、議場の整理は、自然の成行に委せるより外ありません。休憩の必要がありますか。ないと認めます。それでは、その次、あなた……いゝえ、あなた、角帯のお方……

兩角 僕は、兩角です。さつき犬の問題がでしたが、僕は、近所の鶏に迷惑をしています。人の家の庭へはひり込んで草花の芽をほちくる。それから、黙つてゐると、椽側へ上つて糞をして行きます。書齋のそばへ来て、けたまひしい聲を立てます。追つ拂つてもすぐやつて来る。僕は、そのために神経衰弱にかゝりました。夜、鶏に腹をつつ突かれる夢をみる。女房の顔が牝鶏の顔に似て来るんです。(賛成といふものがある)

鬼骨 まだまだ。

兩角 僕は、鶏屋以外、鶏を飼ふことを禁じる案を提出します。

甲吉は、さつきの騒動以來、念吉の膝に抱かれてゐるが、この頃から、ぼつぼつ、頭を父親の胸に埋めて眠りはじめる。

鬼骨 これは大分議論があるでせう。

尾畑 さういふ難題を出される前に、御自分が、鶏のゐない町へ引越されたらどうです

か。(賛成といふものがある)

兩角 鶏のゐない町……それは久しく僕の探し求めてゐる町です (丸の内へ行け)といふものがある) 鶏のゐないところには細菌が充満してゐます。

岩城 兩角さんに申上げますが、鶏、鶏とおつしやるのは、多分わたしのところの鶏を指しておつしやるのでせうが、なるほど、御尤もの點もあると思ひますから、將來、垣根を越えないやうに、なんとか設備をすることにしませう。しかし、この機會に希望しておきますが、お宅の下水は、みんなわたくしの家の庭に流れ込んで来るやうになつてゐる。あれは、早速、工事をしていただきたい。穴を掘ればなんでもないことですから……

藤卷 横から口を出すやうですが、岩城さん、あなたのところの流しの水も、おほかたわたくしの屋敷へ流れて来るやうになつてをります。あれは、どういふもんでせう。

岩城 いや、そんな筈はありません。わたしのところは、ちゃんと吸ひ込み式になつてゐます。たゞ、兩角さんの方から流れて来るやつだけは、面倒ですから、お宅の方へ溝をつけました。たゞ、それだけです。

藤卷 たゞそれだけは有難くないですなあ。



鬼骨 (鉛筆の尻で机を叩き) さうしますと、さつきの兩角案は如何いたしませう。兩角岩城兩家の問題としますか、一般に採決を取りますか。(「その必要なし」と云ふもの一人。「採決を取れ」と應ずるもの二人) その必要なしと認めます。(「議長不公平」と云ふものがある) それなら、採決を取ります。鶏を飼ふことを禁ずる案に賛成の方……。一、二、三、四……。(二見はその一人である) 少数と認めます。鶏は飼つて差支ありません。その次、榎谷君……。

藤卷 まだ、下水の問題が解決されてゐません。

鬼骨 隣から流し込まれた汚水は、そのまた隣りへ流し込まず、その一軒で喰ひ止めるべきこと、これについて、諸君……？

兩角 賛成。

鬼骨 少し急ぎませう。(下を向いたまゝ) 賛成、多数と認めます。次は、今里君……。

今里 (やうやく我に歸り、甲吉を抱いて蒲團の上に寝かせ) かういふ會合は、日曜日に開かないやうにしていたゞきたいです。日曜日でもいゝから、誰かほかの人の家でやつて貰ひたい。僕は、勿論缺席しますよ。

二見 若し、パパが、あたくしを代理に出してくれたら、あたくしは、みなさんにかう

申し上げるつもりです。——お互に蔭口は慎みませうつて……。あたくしが、どなたに會つても、先へお辭儀をしないなんて、どこの奥さんがおつしやつたんでせうね。

葉繪 あたくしが申しました。

二見 あら……。

葉繪 御存じなかつたんですか。百瀬さんの喋舌は中途半端なんですのね。

鬼骨 その代り、あなたのことを、誰のことかわからないやうに褒めておきましたよ。

なに、さういふことは、あなたばかりが云つてるんぢやない。第一、尾畑さんの奥さんもさう云つてた。

尾畑 家内はなんと申したか知りません。しかし、宅の家内が洋装をして出掛けるのを見て、人差指に帽子を被せたやうだなんておつしやつたのはどなたでせう。

二見 それは、あたくしぢやございません。パパでございます。あたくしは、たゞ笑つただけでございます。どこからそんなことがお耳にはひりました？

尾畑 お宅の坊つちやんが、なんでもおつしやる。

鬼骨 (鉛筆で机をたゞき) それでは、「人の噂は子供の前でするな」この提案を、わたしからいたします。これに賛成の方……。



この時、何處かできたゝましい鶏の啼き聲が起る。それは、犬に追ひかけられて逃げ惑ふ鶏の悲鳴に違ひない。片倉州藏が先づ門外に飛び出す。尾畑がこれに續く。

百瀬鬼骨は、しばらく耳をすましてゐたが、いきなり庭に飛び降り、一目散に駆け出す。

鬼骨

(門の外に出るや) こら、ベス！ ベス！ シツ！ ベス！ 今里さん、ベスを…

…。今里さん…早く…。こらツ！ シツ！

一同、外へ出る。犬の後を追ふもの、「うし、うし」とけしかけるもの、さまざま。念吉は、椽側で、ぼんやり、眼をつぶり、二見は、甲吉の寝顔を見つめてゐる。屋外の暗く騒々しいのに引替へ、家の中は、電燈の明るい光の下に静まり返つてゐる。

幕

かんしやく玉



阿 小 彼 多 隣 彼

の

部 森 田 女 女



アパートとは名ばかりの、粗末な貸室。左の隅にダブルベット。右に炊事場に通ずるドア。正面に舊式のシンガアミシン。

三月のなかば。午後四時ごろ。

彼女は、ミシンの手をやめ、縫ひかけのロープを両手で胸にあてがひ、鏡の前に立つ。

彼女

(獨り) なかなかいぢやないの。カーテンのお古だなんて見えやしないわ。

ドアをノックする音。彼女は、黙つてドアを開けに行く。隣の女がバナナをたべながらはひつて来る。

隣の女

このいゝお天氣にお留守番なの？

彼女

あなたこそ珍しいわね、今ごろ、家にゐるなんて……。

隣の女

だつて、まだ早いぢやないの。さつき起きたばかりよ。これからお湯へはいつ

て、足の爪でも剪つてると、あの人が迎ひに来てくれるの。今日は、ことによると、鎌

倉へドライブだわ。

彼女

そんなの、羨ましくないや。あたしは、これから八百屋へ行つてトマトを買つて

来るの。ちよつと、これ、似合はないこと？

隣の女

不斷着ならそれで澤山よ。

彼女

(ロープをベッドの上に放り出し、テーブルの上の丸い罐の中へ手を突込み、なにかを床の

上へ叩きつける。爆音。)

隣の女

あゝ、びっくりした。なに、それは……。

彼女

疝癢玉……。

隣の女

こなひだうちから、バンバンいはせてるの、それね。どら、あたしにも一つ、

やらして……。

彼女

駄目よ、あなたなんか……。これはあたしと、うちとの、二人っきりの玩具よ。

持つて行き場のない不平が、これでけし飛んぢまふの。それや、清々するわよ。

隣の女

簡単ね。あたしは、何か氣に入らないことがあると蒲團を被つて寝ちまふの。

眼が覺めると、忘れてるわ。ちよつと、あんた、すまないけど、またヘチマコロン貸し

てくれない？

彼女

そこにあるから持つてらつしやい。(化粧テーブルの上を願で指す)

隣の女

あら、もう一度分きりないわ。

隣の女が、ヘチマコロンの瓶をもつて出て行くと、彼女は、炊事場にはひる。やがて、兩



手にナイフを持ち、「守るも攻むるも」の節に合わせて、刃を砥ぎながら現れる、何か探し物をするらしく、部屋中をひと廻りするが、そのまゝ、また炊事場にはひる。ドアをノックする音。

彼女の聲　どなた？

外の聲　僕……。

彼女の聲　僕ぢやわからない。

外の聲　僕ですよ。わからないかなあ。

彼女の聲　多田さんね。なんべん来たつておんなじよ。まだ歸つてやしないわ。

ドアが開く。多田現れる。

多田　奴さん、用がある時に限つてゐないんだから、始末にいけないなあ。

彼女　（現れ）ぬさうもない時に來るからわるいのよ。朝出て晚歸つて來るぐらゐのことはわかつてるでせう。

多田　不斷はさうさ。だけど今先生仕事がないんだもの。

彼女　ないから探しに行くんぢやないの。

多田　（椅子に腰かけテーブルの上の新聞を取り上げ）今日は何處へ行つたの？

彼女　その、印しるしのつけてあるとこでせう。

多田　なるほど、これやよささうだ。志操堅固なる青年紳士を求むか。

彼女　なに笑つてるの？

多田　僕にも一つ、心當りがあるんだけど、まあ、こつちがうまく行かなかつた時のことにしよう。

彼女　あなたの心當りつていふのは、新聞廣告より、もつと當てにならないわ。

多田　こなひだのは、あれや、失敗だ。獨身つていふ條件があつたのを、つい、先生にいつとくのを忘れたんだ。

彼女　嘘を吐けば、後で困るぢやないの。第一、人を使ふのに獨身を條件にするなんて、間違つてるわ。

多田　家を貸すのに、子供がない夫婦つて注文を出すやうなもんでね。つまり氣休めさ。

彼女　お茶、飲む？　飲まない？

多田　飲む。

彼女　冷たい紅茶よ。お砂糖いる？　いらない？



多田 いるさ。

彼女 そんなもの、あつたか知ら……。

彼は炊事場から茶の道具をもつて出て来る。注ぐ。

多田 これで世の中は思ふやうにならんもんさ。あんたが働くつていへばすぐにでも雇ひ手があるんだがなあ。

彼女 あたし、ちよつと、買物に行つて来るから、そこに、さうしてね。

多田 その間、ベッドを借りてもいゝでせう。今朝から歩きづめで、どうにもやりきれない。

彼女 馬鹿なこといひつこなしよ。そんなに草臥れたなら、さつさと家へお歸んなさい。

多田 よろしい。意地悪をいふなら、たつて借りようとはいひません。あんなベッドがなんだい。貸間備附のピヤレツスが、そんなに神聖なのか。

彼女 面倒臭いなあ、靴下を穿くのは……。

多田 僕で出来る買物ならして来てあげますよ。

彼女 ほんと……？ ぢや、お願ひするわ。晩のおかずよ。

多田 え？

彼女 ファイルの厚切れ三枚……それとトマトの中ぐらゐのを、五つ……。それから、あんな、パンがよかつたら、パンを買つてらつしやい。

多田 しかたがない。(起ち上る)金は……？

彼女 どうぞよろしいやうに……。 (もう炊事場に姿を消す)肉屋は、停車場の前の方が勉強するのよ。

多田は、しぶしぶ外に出て行く。

やがて、彼女は、フライパンを紙で拭きながら現れる、さつきの罐の中から、また疳癩

玉を取り出し、床に叩きつける。

爆音。

彼女はそのまま、窓の外を見てゐる。

涙がこみ上げて来る。

長い間。

ドアが開く。彼が歸つて来る。

彼女 (後ろを振り向かずに) あら、どうしたの。帽子でも忘れたの？  
彼 そんなところで、なにしてるんだい。



彼女 (その聲で、ハッと氣づき) お歸んなさい。(さういひながら、フライパンを持つたまゝ、いきなり、夫の頸に抱きつく)

彼 どうしたんだい。泣いたのか。

彼女 うん、泣いたの。

彼 なにが悲しかった?

彼女 ムニヤムニヤムニヤ……。 (笑はうとする)

彼 さ、どけ。飯はまだか?

彼女 (離れて) 駄目だったの?

彼 そんなことはいゝから、早く飯を食はせろ。

彼女 いますぐよ。そら、瓦斯の音が聞えるでせう。あつたかい御飯でピフテキが食べたいつて、あんた、さういつてたぢやないの。さ、外套脱がしてあげませう。

彼は、彼女に外套を脱がして貰ふとテーブルの方へ手を伸ばす。鍋の中から疳癩玉をつかみ出し、續けざまに、三つ、それを床の上に叩きつける。爆音、爆音、爆音。彼は、それから、椅子に腰をおろす。

彼女は、彼の肩に手をかけ、そつと、耳もとで囁く。そして笑ふ。

彼 そんなことをさせるから、あいつ、つけ上つて、用もないのに、しよつちゆうやつて来るんだ。

彼女 だつてそれでなければ、今晚はトマトだけのはずよ。

彼 こつちで利用したつもりでゐると、そのうちにこつちが利用されるんだ。ピフテキの返報に、何を要求されるかわからんぞ。

彼女 それほど圖々しい人でもないわ。

彼 それがいけないんだよ。君には、どこか、危なつかしいところがある。どの邊で踏み止るかつていふ見當が、僕にはつかないんだ。

彼女 でも、はじめ、あたしが買物に出るから、留守番をしてゐて貰はうと思つたら、その間、ベッドを借りてもいゝかつて訊くのよ。

彼 それで……?

彼女 そんなこと、あたしいやだから、斷つたわ。

彼 なんて?

彼女 馬鹿いふのもいゝ加減になさいつて……。

彼 (いままいさうに舌打ちをする)



彼女は、それと見て、すぐに鑑の中から疳癩玉を取り出し、彼に渡す。彼、それを叩きつける。爆音。

彼 君は、あいつに好意を有つてやしまいね。

彼女 好意つて……？ あんたのお友達としてだけよ。

彼 それにしてもさ。

彼女 どつちかついていへば、蟲が好かないわ。

彼 どういふところが……。

彼女 さういふことをいふところや、あたしを見る時、變な眼附をするところや……。

彼 どんな眼附……？

彼女 口ではいへないやうな眼附だわ。

彼 よし。(險しい顔附になる、彼女は、また、疳癩玉を渡さうとするがその手を押しつける)それ

れぢや、僕のところへ来る奴の中で、誰が一番、君は好きだ？ 好きつていふとわるい

が、誰が一番感じが好い？

彼女 感じの好いのなんかゐない。

彼 小森はどうだい？

彼女 あんなのいや。

彼 なぜ？

彼女 つまんないところで、熱情家ぶる男、あたし嫌ひさ。

彼 そんなら、阿部は？

彼女 あれも、なつちやゐない。

彼 どうして？

彼女 誰かのいつたことを、すぐそばから、もう一度いふだけぢやないの。

彼 ハ、ハ、愉快々々……どら、一つ貸せ。

彼女 あたしがしたげる。(疳癩玉を叩きつける。爆音。)

ドアをノックする音。

彼女 おはひんなさい。

小森と阿部互に顔を見合せながらはひつて来る。

小森 もう歸つてたのか。

阿部 まだ歸つてないかと思つた。

彼 なにか用か？



小森 君の仕事のことで、一寸風變りな口を見つけて來たんだ。

阿部 全く風變りなんだ。

彼 まあ、かけるよ。

彼女 もう、御飯お濟みになつて？

小森 え、すみました。

阿部 今、そこで、やつて來たところです。

彼 どんな話だい？

小森 僕も、いろいろの方面を當つてみたんだがねえ。なにしろ、君の性質だつて知つてるし、何處でもいふといふわけに行かんからねえ。實は、こいつとも相談して、ある金持の息子をおだててみたんだ。

阿部 おだてたといふと可笑しいが、まあ、おだてたんだなあ。

小森 つまり、こゝで二千圓ばかりの資本を出させて、君と細君とに喫茶店かバアのやうなものを開かせようつていふんだ。それも、極くハイカラなね。つまり、奥さんの感じで行けばいゝんだ。

阿部 さうだ、奥さんの感じだ。明るくつて脆い感じだ。

小森 そこで君も、少し陽氣な顔をして、ひとつ、カクテルの調合でも覚えるんだなあ。

あ。

阿部 こいつは、なんでもないよ。君にやる氣さへあれあ……。

小森 利益は勿論、店の經營と君たちの生活費に充てるわけなんだが、最初、奥さんの衣裳ぐらゐ、特別に作らしてもいゝんだ。

阿部 さうだ、衣裳は大事だからなあ。洋裝がいゝね、やつぱり……。

小森 どうだい、これなら不服はないだらう。是非奮發しろよ、われわれも大に聲援するぜ。

阿部 その方なら引受けるな。奥さんはどうです。さういふ仕事に興味は……。

小森 大勢女なんか置くよりも、少し忙しいかも知れないが、奥さん一人で、ファミリーアルなサアヴィスをして貰つた方が、人氣は出ると思ふんだ。

阿部 その方が、第一、落ち着いた、物靜かなといふ特色が出せるよ。

ドアが開く。多田が、牛肉の包みと、トマトの袋を提げて歸つて來る。

彼女 どうもありがたう。それぢや、そのお話は後で伺ふわ。

(炊事場にはひる)



多田 何の話だい？

阿部 ちよつと祕密の談合だ。

小森 祕密といふほどでもないが、今、発表したくないんだ。いづれ君にも後援は頼むよ。

多田 こいつの仕事かい？

小森 うむ、まあ、そんなことだ。頼むから、今日は歸つてくれ。君がゐちや、話がしにくいんだ。

多田 そんなら、おれの方を先へ話さう。實は、そのことでやつて來たんだが、君たちがゐれば、君たちの意見も聞きたい。かういふ話があるんだがどうだらう。おれが前に世話になつたことのある老教授なんだがね。今、隠退して著述に没頭してゐるんだが、助手の外に、もう一人、ほんの雑用だけをする若い人を探してゐるんだ。條件は、専門の學問はいらなから、快活で、氣轉の利いたなるべく生活の苦勞を知つてゐる人といふんだ。午前九時から、午後四時まで、晝食は向うで食つて、月給三十圓といふんだから、まあ、オフィス並だ。

小森 男でね……。

多田 無論女さ。

彼 なんだ、女か、その話は……。

多田 だからさ、君の口は後からみつけるとして、こいつ、奥さんにどうかと思つてさ。

彼 ワイフのことを何時頼んだ？

多田 頼まれなくつたつてそれくらゐの心配はするさ。

彼 餘計な心配だ。

彼女 フライパンを持つたまゝ現れる。

彼女 今のお話、よく聽いてなかつたわ。あたしがどうしたつていふの？

多田 (振り返り) いや、それがねえ……。

彼 (怒氣を含み) おい、そんな眼でみるのはよせツ！

多田 え？

彼 そんな話は聞きたくない。早く歸つてくれ。

多田 しかし……。

彼 歸れつたら、歸れ。



多田 案外開けない奴だなあ。なあ、おい、君たち、どう思ふ？ 外の場合と違ふぢやないか。いつまでもかうしてれば、食へなくなるのは眼に見えてゐる……。奥さんだつて、その方がどんなにいゝか……。

彼 やかましい。奥さん奥さんつて、貴様がそんなことに立入る必要はない。

小森 話が後先になつたんだ。

阿部 先に、さういへばよかつたんだ。

多田 そんなに怒るなら、歸るよ。冗談ぢやない。自分を知れ、自分を……。

多田 すぐど部屋を出る。

小森 さう、まあ、腹を立てるなよ。あいつも親切でいつて來たんだ。しかし、人間は感情の動物だ。あの切出し方は、たしかに不味かつた。だからさ、おれの方の話を聽け。男らしく、うんといへ。

阿部 おれたちの話は、同じ親切でも、君の感情を尊重してかゝつてゐる。悪いことははない。うんといへ。

彼 いやだ。

長い沈黙。

彼女は、テーブルの上を片づけ始める。

小森 君には、おれたちの真心が通じないのか。

彼女は、食器を運んで來る。

阿部 君たち二人によるこんで貰へると思つて來たんだぜ。

彼女は彼の向ひに腰をおろし、焼きたてのピフテキを、めいめいの皿につけ、飯をスープ皿によそふ。

彼女 ぢや、失禮して、御飯にしませう。

彼の友二人は、適當に椅子をずらす。

彼女 こつちのナイフがよく切れるわ。いゝの、あんた二た切れたべていゝのよ。

小森 さういふところを見ると、僕はつくづく、二人を幸福にしたい。そのために一生を捧げていゝやうな氣がするんだ。

彼 熱情家ぶるのはよせ。

阿部 この二人を幸福にするといふことは、友達として甲斐のある仕事だ。

彼 人のいつたことを、すぐあとからいふな。

小森 こいつ、どうかしてるな、今日は……。



阿部 たしかに、どうかしてる。

彼女は、肉を頬張つたまゝ、笑ひたいのをこらへてゐる。

小森 こんな時、何を話しても無駄だ。歸らう。

阿部 また機嫌のいゝ時に出直して来よう。

二人は彼女に會釋して退場。

彼、ナイフとフォークを投げ出して不愉快さうにその後を見送る。

彼女、素早く、疳癪玉の罐を持つて来て、彼の方に差出す。

彼はそこから、一つを取り上げ床の上へ叩きつける。爆音。また叩きつける。爆音。

彼 あんな話をされて、君はなぜ黙つてるんだ。(また叩きつける。爆音。)

彼女 どんな話……？

彼 バアを開けなんていふ話さ。

彼女 あたし、面白いと思つて聽いてたわ。

彼 (また叩きつけ) なにが面白い！

彼女 (これも、すぐに罐の中に手を入れ) 面白いぢやないの！(叩きつける、爆音。)

彼 世間の奴らは、おれを馬鹿にしてる！(叩きつける、爆音。)

彼女 あんたのひがみよ。あたしが働いちや、どうしていけないの？ こなひだうちか

ら、さういつてるでせう。一緒に外へ出て働きませうつて……。それを、あんたが許し

てくれなかつたんだわ。どうしてなの？ 女に稼がせちや、男の顔にかゝはるとでも思

つてんの。そんな馬鹿なことつてないわ。

彼 おれは、君に働いてなんぞ貰ひたくない。貧乏をするのも辛い、君に食はして貰

ふのはなほ辛い。

彼女 誰も、あんたを食べさせるといやしないわ。めいめいが、自分で食べるだけだ

わ。それもいやなら、あたし、あんたに食べさせて貰つた上、自分で稼いだお金は自分

で贅澤をするわ。

彼 その贅澤も、おれがさせてやるんでなければいやだ。

彼女 あたしも、その方が結構だわ。なによ、そんな眩しさうな顔して。そこは夕日が

あたるからよ。もつと、こつちをお向きなさいよ。(彼女は彼の兩肩をもつて自分の方へ捻

ぢ向ける)

彼 おれには友達なんぞ一人もない。あれや、みんな、君の友達だ。

彼女 おや、また、別の話になつたの？



彼 あいつらは、君にだけ親切が見せたいんだ。

彼女 (疳癩玉を渡す) はい。

彼 絶交だ。(叩きつける。爆音)

彼女 (それに應じるやうに、叩きつける) むろんよ(爆音)

彼 酔ひどれの膝に、しなだれかゝる氣か、君は……。そんな、そんなことがさせられるか。(叩きつける。爆音)

彼女 あゝ、さういふ意味なの？ 衣裳を作つてやるつてさういふ意味なの？ そんなこと、誰がするもんか！ (叩きつける。爆音)

彼 もうひと息だ、我慢してくれ。おれの愛し方には缺點もあるだらう。君が、その缺點に堪へられなくなつた時は、おれは、もう、君にとつて用のない人間だ。

彼女 (彼の後から抱きつく様にして) 大丈夫よ。大丈夫よ。

彼 大丈夫か？ ほんとに大丈夫だね。

この時、隣の女が、そつとドアを開ける。

隣の女 あら、御免なさい。これ、みんな使つちやつたけど、とにかくお返しするわ。

彼女 (へちまコロンの空瓶を受け取り、ドアを閉める)

彼 あの女、いやにおめかしをしてるぢやないか。

彼女 そんなの、見ないだつていゝことよ。

彼 見るわけぢやないさ。たゞ、君の前では、もつと遠慮をするといゝんだ。

彼女 そんな下らない心配はおよしなさい。あたし、かうするから……。 (疳癩玉を叩きつける。爆音)

彼 ほんとだ。おれは、どうして、かうケチな量見しかもてないんだらう。われながら腹が立つよ。どら、貸せ。もうないのか。なんだ、空っぽぢやないか。えゝツ、糞、どらうして、もうないんだ……。

彼女 もつといるの？ もつと欲しいの。疳癩玉……？ だつてだつて、もうおしまひよ。そんなら、そんなら……。 (あたりを見廻し) 待つて頂戴……。これは？ (へちまコロンの空瓶を差出し) え、これは？……これぢや、いけなくつて……。

彼 (へちまコロンの瓶を受け取り、そいつを振り上げるが急にぐつたりと椅子に倚りかゝり) こんなもの、ぶつけたつて、しようがないや……。

彼女はいきなり彼の胸に顔を埋め聲を忍んで泣く。

—幕—



運を主義にまかす男



底野 (又はカマボコ)

飛田 (又はトンビ)

こよ 以前の下宿の娘

口髭を生やした行商人

廢兵と稱する押賣

鶯を飼ふ老人

宇部家の小間使



底野、飛田の兩人が共同で借りてゐる郊外の小住宅。座敷と茶の間の外に玄關。男ばかりの暮しが、家中全體を殺風景にしてゐるが、それだけ伸々とした空氣が、何處かに漂つてゐる。

底野（二十八）が、薄つぺらな座蒲團を二枚並べ、その上に寝轉んで古雜誌かなにかを讀んでゐる。これは、ある大學を中途で止め、郷里にはそれを黙つてゐて送金だけを受けてゐたが、學校を卒業する筈の年が容赦なく來てしまひ、もう一年落第したことによつて思つたのに、親父の方が先手を打つて、今年限り學費は出さぬ、その代り就職口がみつかるまで、月々二十圓づゝ生活費のたしを送るから、あとはどうかしてそつちで都合をしろと宣告して來たのである。それでも、ぶらぶらしてゐて月々二十圓貫へば、無理をして仕事の見つけ、朝から晩までからだを縛られてゐるよりはましだと考へ、こゝ二年間、

世間一般の就職難を口實として、毎日、かうして寝轉んでゐるのである。

相棒の飛田（二十七）とは學校の同窓で、しかも、以前、同じ下宿にゐたといふ關係から、自然、肝膽相照す間柄となり、飛田が卒業後或會社に備はれる幸運を得た機會に、最も經濟的にして且つ衛生的と稱する郊外の自炊生活を始めたのであるが、飛田も亦、僅か數ヶ月にして、會社から爾後出社に及ばざる旨の通知に接し、百方運動を試みた甲斐もなく、之に代る椅子を贏ち得ずして今日に及んでゐる。しかしながら、彼飛田は底野と違ひ、生れつきの苦勞性で、これまた情を訴へれば二人の兄と二人の姉から月にそれぞれ五圓や三圓づゝ小遣はせられる身分でありながら、それだけでは決して満足せず、ひたすら好機會を外に求めて、毎日西東と駈け廻つてゐる。

さて、今日も、昨日の如く、底野は『界報は寝て待て』主義を、飛田は『犬も歩けば棒に當る』主義を實行してゐる。

玄關の戸があき、大きな手提鞆を提げた紳士風の男がはひつて來る。

男 御免。

底野 （寝轉んだまゝ） どなた？

男 奥さんはいらつしやいますか。



底野 まだをりません。

男 では、失禮ですが、御主人にちよつと……。

底野 どうぞお上り下さい。

男 いや、こゝで結構です。

底野 どういふ御用ですか。

男 實は、わたくしは、かういふものでございますが……。(名刺を出す)

底野 口で云つて下さい。

男 はい。名前を申上げて、無論、御存じないわけですが、實は、わたくし、もと満鐵に勤めてをりましたもので、故あつて最近職を退きましたにつきましては……。

底野 就職のことなら、ちよつと心當りはありませんがね。

男 いえ、さういふわけではございませんですが、その、突然のことでもあり、家に蓄へはございません、子供は五人、これがまた至つて幼少でございます、前途甚だ不安を感じますやうな次第で……。

底野 僕のところでは、誰にも一切寄附はしない、滿洲軍にさへ町内の慰問資金を斷つたくらゐですから……。

男 いやいや、決して寄附施しの類たぐひをお願ひしに参つたものではございません。實は、さういふ次第で、わたくしもまだ老齡と申すには間がございますのを幸ひ、大いに勇を鼓して、斷然、街頭に進出する決心をいたしました。それにつきましては、何か他人の氣附かない職業、またその職業の種類は同じでも、何處か一點特色のある内容を選ばうと思ひまして、いろいろ苦心いたしました結果……。

底野 名案がありましたか。

男 と申しますのは、世間普通に行はれてをります行商にいたしましたしても、やれ文房具であるとか、賣藥の類であるとか、これは一向珍しくございません。わたくしが伺ひます一時間前に、他のものが伺つてゐるかもわかりません。これでは勞して益のない道理でございます。

底野 僕のところは、かう見えて、なんでも揃つてますから、今、差し當り欲しいものはないんですがね。

男 ちよつとお待ち願ひます。そこで、わたくしは考へましたんでございます。これはひとつ、他の行商人が持つて歩かないもの、殊に、皆様が御近所では容易にお手にはひらないもの、或はまた、形は同じでも質の違ふもの、値段がお安くて品がよいもの、か



ういふ按配に目先を變へて一軒一軒をお邪魔して歩きましたら、また、その宅次第ではお目に止るものがありはしまいか、なるほど、かういふものは買つておいて損はない、これは珍しいから誰それさんにも分けてあげよう……。

底野　もしもし、それでわかりましたがね、生憎、僕の家にある男が、やはり君のやうな思ひつきを、今實行してゐるんですよ。こいつが、大概のものを持つてますからね、わざわざほかから買ふ必要がないんだ。

男　お言葉でございますが、人それぞれの頭は、働き方が違ひまして……。

底野　ところが、そいつと來たら、言ふことが君と同じでしてね。頭の働きもよく似てるんだ。

男　はゝゝゝ、御戲談でせう。わたくしは、元來、生ひ立ちから申しまして、多少人様と違つたところがございませうし、決して、人様の眞似や、人様から眞似られるやうなことは……。

底野　それさ、君、その男といふのが、實にまた人と違つたところがあつてね。

男　それはさうでございませう。ですが、甚だ勝手をお許し願へれば、ひとつ、そのお方のお持ちになる品と、わたくしの持参いたしました品とをお比べ下さいまし。恐らく

どれひとつ同じものはございません。

底野　さあ、そんなら、君は何と何を持つてゐるの。

男　有りがたうございます。恐れ入りますが、これをちよいと御覽願ひまして……。

底野　見なくつても、品物の名前だけを云つて見給へ。

男　畏こまりました。えゝ、これが、その、當節問題になつてをります『まむしの丸

薬』……。

底野　あゝ、それはあつたよ。

男　しかし、この品は、信州伊那の里から直接取り寄せました純粹混ぜものなしの……。

底野　ところで、そいつは、何に效くの。

男　老若男女、これを用ひまして、精力の衰ふるを知らず……。

底野　あ、それや、駄目だ。そんなものを飲んでこの上精力なんかつかれちや堪らないよ。なんとかしてそいつを散じようと心掛けてるくらゐだ。

男　では、その方は御用がないとして、この胚芽から取りました消化薬……。ヂヤスタ  
ーゼなどより遙かに……。

底野　おい、おい、馬鹿云つちや困るよ、君。たゞでさへ食つたものが腹へ溜らなくて



始末に悪いんだ。よしてくれ、そんなもの……。話を聞くだけで胃がキュウキュウ鳴りだした。

男 それでは、この完全燃焼を特長とする小粒煉炭……。

底野 火の氣は一切禁物だ。

男 では、この、毛織物に特效ある蟲よけ香錠……。

底野 そいつは、質屋の方へ持つてつといてくれ。

男 最後に、卸値段の精選脱脂綿、薬局でお求めになるより四割方お徳用……。

底野 折角だが、女が一人もゐないんでね。

男 (荷物を片づけ) どうもお邪魔いたしました。またどうぞ、御用の節は……。

底野 寝たまゝ失敬。(さう云つて、また雑誌を読み続ける)

やがて、また、今度は勝手口から、若い女の聲で『御免下さい、御免下さいまし』

底野 (元氣よく起き上り) おはひんなさい。どなた？

女の聲 あたしよ。

底野 あたしつて誰だい。あたしちや多勢ゐてわからねえや。まあ、どのあたしでもい  
いからおあがりよ。

若い下町風の娘がはひつてくる。前の下宿の娘こよ(十九)である。

こよ (軽く手をついて) こんにちは……今日はお一人？

底野 一人だつていゝぢやないか。奇麗になつたね。

こよ 奇麗になつたつていゝぢやないの。

底野 それや無論、悪いた云はないさ。どうだい、家は相變らずかい。

こよ えゝ。あんたんとこは？(あたりを見廻し)この前より落ちついて來たわね。

底野 (これもその邊を見廻し)どの邊が？ 板津や神谷はまだゐるかい。

こよ えゝ、神谷さんは、この春奥さんを貰ふんですつて。今、家を探してるわ。

底野 板津は、やつぱり下宿代を溜めてるかい。

こよ ふゝん、どうだか……。人のことなんかなんだつていゝから、あんた、どうかし

なさいよ。あたし、いやだわ、こんなこと、しよつちゆう云ひに來るの。母さん、怒つ

てゝよ。それや嘘だけど、ほんとに少しづゝでもいゝからつて云つてるわよ。家から來

るんでせう。

底野 二十圓づゝ來るには來るよ。そのうちをどうかしろつていふのかい。蟲がよすぎ  
るぜ。



こよ あら、そつちこそだわ。二十圓がさ、こんな風にして、何にかゝるの。

底野 おい、失敬なこと云ふない。斬髪だつてチップを含めれや一圓はかゝるぜ。

こよ その頭、何時刈つたのさ。

底野 忘れるくらゐ度々刈つてらあ。時に片岡千恵藏は見に行くかい。

こよ え、ついこなひだ、あれ見たわ、なんだつけ……。

底野 そいぢや、この秋のリーグ戦は、誰かに切符貰つた？

こよ 何處だつて、大抵手にはひるわ。二枚はむづかしいけど……。

底野 おれも、この夏から月給取りだぜ。いま人にや云へないが、ある三井系の會社だ。

七十圓だけど、初めにしちやいゝだらう。

こよ ほんと、それ？ 出鱈目でせう。

底野 いゝよ、さう思ふなら……。君さへよけれや、おれや、一生、貧乏してゝやる。

こよ ちよいと、あたし、喉が渴いちやつたわ。

底野 井戸の水は、自慢なんだがなあ、尤もそいつあ大家の話なんだけど……。

こよ 家賃ちゃんと拂つてる？

底野 ちゃんと拂つたら、かうして生きちやゐられんね。

こよ そんなこつたらうと思つた。(起つて水を飲みに行く)

底野 おれにも一杯頼むぜ。茶碗がそこにあるだらう。君の飲んだあと、洗はなくていいや。だが、いゝなあ、かうしてたまに君と話をするなあ……。なあ、おい、こよちゃん、時々、なんべんも来てくれよ。誰かの煙草を買ひに行く時、ちよつと電車へ乗つちまへばいゝんじゃないか。

こよ現れる。茶碗に水をいれて来る。

底野 ありがたう。なるほどうまい水だ。これで少し砂糖でもはひつてると申分はないんだが……。あゝ、さうだ、こよちゃん、こんど来たとき返すから、朝日一つ買つて来てくれよ。君だつて、もう一二本は喫つてもいゝ年頃だぜ。君のその口元でさ、齒の間にちよつびり煙草のやにくつゝけてるなんて、繪にだつてありやしないぜ。よう、買つて来てくれつてば……。

こよ だつて、あたし、今日は往復の電車賃きり貰つて来ないんですもの。ちよいと、

火鉢に火もないの。

底野 ぢや、歸りの分は落したつて、歩いてけばいゝぢやないか。

こよ こつから神田まで……？ 一體、どれくらゐあるの、十里ぐらゐあつて……？



底野 馬鹿云つてらあ。電車で市内とも三十分ぢやないか。三十分つて云や、普通の足で一里足らずだ。

こよ さうを。そんなの？ でも、一里歩くのいやだわ。あたし、近頃、少し歩くと（左の胸をおさへ）こよがどきどきして、なかなかとまんないのよ。

底野 年頃になれば誰だつてさうだよ。おれだつて、もう五六年前までは、さういふ風だつたよ。何處か外へ出ると、歸つて来るまで呼吸が苦しいんだ。歸つて来てからでも、暫くは、誰とも口を利くのがいやだ。一人でぢつと空を見たり、空が暗ければ、疊の上の焼こげを見つめて、大きな溜息を吐いたもんだ。あれや、しかし、苦しいもんだけど、また、なんとなく、楽しいもんだ。

こよ あら、そんなのとは、また違ふのよ。

底野 男と女とでは多少容態が違ふさ。こよちゃんは、今年十九だらう。おれが二十八だ。悪いことは云はないから、貧乏な奴んどこへお嫁に行くなよ。貧乏でもいゝから、何時でも少しづゝ現金を持つてる奴んどこへ行け。いざつていふ場合に困るからな。それから、なんでも、途中で止めたつて奴のところへ行つちやいかん。行商でも初めから行商をしてる奴ならいゝ。それもなるべくひと品だけを賣るつていふ主義でないといか

ん。

こよ いゝわよ、そんなお説教聞かなくつたつて……。そいぢや、今日は駄目ね。

底野 駄目でもないよ、どうせ暇なんだから……。ゆつくりしてき給へ。

こよ さうぢやないのよ。お金のことよ。

底野 金のことなら、飛田が歸つたら相談しとかう。出る時に持つてなくつても、歸りには持つてかへるといふことが、間々あるもんだ。尤も、あいつは、拾ひでもしなければ、十圓とまとまつた金を持つて歸る筈はない。まあ、この夏まで辛棒し給へ、お互にね。

こよ （諦めて）ぢや、歸るわ、あたし。

底野 あつさりしてるね。まあ、茶碗でも片づけてけ。

こよ （茶碗をもつて勝手に行き、そのまゝ） さよなら……。

底野はまたひっくり返る。今度は、雑誌も讀まうとせず、毛布を腰に巻きつけ、兩腕を上下して體操みたいなことをする、燵を取るためであらう。そこへ、表から、飛田が歸つて来る。洋服を着てゐる。

底野 おい、トンビ、今、そこで誰かに會つたらう。



飛田 うん、會つた。

底野 どうだい。おれのこと、なんか云つてたか。

飛田 いゝや、別に……。これから現金でなければ、一切配達はしないつて斷りやがつた。

底野 なんの配達？

飛田 米でも炭でもさ。

底野 米？ 炭？ なんだ、それや。相模屋の御用聞か。

飛田 さうさ。例のエへ、つて調子ぢやなかつたぜ。

底野 それだけか。他には誰も會はなかつたか。

飛田 それを今、話さうと思つてるところだ。

底野 おつと、それなら、こつちが先だ。なあ、おい、たつた今迄、そこに坐つてさ、

今日は、ひとしほ晴れやかに、また馴れ馴れしくおれと語つて行つたぜ。髪は何時もの髪だが、まだ結ひたてど油も腐らず、前掛けは餘所行の、例の緋の裏さ。今年は大して霜焼も目立たず、足袋をはいてゐるから光つた足の裏も見えない。

飛田 それより、おれは、今日、あいつに會つたよ。誰だか當てゝ見る。

底野 だから云つてるぢやないか、なるほどこゝへ來たことを黙つてゐたと見える。いきなり、その邊を見廻してさ、『あんたも、近頃貫目がついたわね』つていやがる。

飛田 そんなことより、こつちはどうだ。おれの顔を見ると、あの眼にもう涙を溜めて……。

底野 嘘つきやがれ。トンビでも、何時の間にか洒落たことを覚えやがつた。

飛田 斷じて嘘ぢやない。——かういふんだ、まあ聽け、『實に懐しい。近頃は どうしてゐる。こんなところで立話もなんだから、その邊のカフェーへでもはひらう。』

底野 (躍起になり) 馬鹿、馬鹿。おれは、外のことは云ひたくないんだ。日頃、貴様が、

おれの主義を輕蔑し、果報は寝て待つべきものではない、よろしく……。

飛田 さうさ。よろしく、外へ出て、方々を探し廻れと云つた。犬も歩けば棒に當る、それが眞理だ。その證據に……。

底野 いや、黙れ。果報は寝て待て、その證據がこれだ。いゝか、それからどうしたと思ふ。下宿代なんか何時でもいゝ。あなたが成功したら、それくらゐ御祝ひに熨斗をつけてもいゝと云つたぞ。それから……。

飛田 それからだ。カフェーなんかの一隅だ。テーブルの上で優しくふるへてゐる櫻



草を挟んで、二人は、しみじみと積る話をした。

底野　なにが、積る話だい。こつちはな、いゝか、驚くな。同じ茶碗で、水を飲んだぞ。その甘さは、丸で砂糖水だ。レモンエキスでも入れてみる、酒石酸を少しと。丸でラムネだ。

飛田　ラムネがなんだ。われわれはカクテルだ。

底野　誰が拂つた？

飛田　向うだ。向うは、今度、親爺の遺産がころげこんだ上に、會社は先輩三人を飛び越して支店長……。月給は少くとも三百圓だ。

底野　なんの話だい、それや。

飛田　そら、ゐたらう、おれと同郷の蜂谷さ。おれは、うれしかった。カクテルに酔つた以上に、おれは、友人の成功に酔つた。幸福な話に酔つた。幸福そのものに酔つた。自分の現在に酔つたんだ。

底野　つまらんものまでに酔ふなよ。それで、そいつが、貴様の云ふ、果報は外を歩いて拾へか。

飛田　犬も歩けば棒に當るだ。

底野　犬の當る棒だから知れたもんだ。

飛田　貴様の話はなんだい。

底野　聽いてなかつたのか？

飛田　よく聽いてなかつた。誰が來たんだい。

底野　おこよさ、池中館ちちうくわんの娘さ。

飛田　なんだ、借金取か。

底野　借金は第二だ。

飛田　おこよが來たからどうだつて云ふんだい。それが、貴様の主義とどう關係がある。不良學生に取巻かれて、精神的處女性をとづくに失つてゐる娘から、何を得たといふんだ。貴様の果報つていふのはそんなことか。

底野　なにを。精神的處女性なるものを、貴様、云々する資格があるか。昔の友人が金持になり、支店長になり、それが、貴様の現在とどう關係がある。カクテル一杯で、頭が變になりやしまいな。公平に比べてみる。たとへ誰のものでもいゝ。たとへ何を失つてゐてもいゝ。この殺風景な、この家賃も碌に拂つてないやうな家の中で、一つ二つは隠してゐるとしても當年取つて十九歳と稱せられる十人並以上の美少女とたゞ二人、火



のない火鉢を挟んで相對坐し得たといふことは、これこそ、おれが日頃……。

飛田 さうだ、それを云ふなら、こつちでも云はう。人口三百万の大東京を中心にして、誰がよく、友人の中で一番出世をした男に廻り會へるか。違つた電車、違つたバスに乗つてゐる二人の人間は、永久に相會することは出来ないのだ。一人が家の中にをり、一人が外を歩いてをれば、これまた、悲しい哉、顔を會はず機會を恵まれ得ないのだ。外は、今日も冬空だ。路は到るところ氷の鍍金だ。男も女も、襟卷に頤を埋め、擦れ違ふ人の横顔さへ振り向いてみようとはしないのだ。然るにだ……。

底野 わかつた。

飛田 然るにだ。

底野 もうわかつたよ。

飛田 いや、しまひまで言はせろ。然るに、偶然と云はうか、神の配劑と云はうか、二人の心が相通じたと云はうか……。

底野 犬が歩いて棒に當つた。

飛田 犬？ 犬とはなんだ。誰が犬だ。

底野 貴様ぢやないか。

飛田 さうか。やつぱり、犬でいゝのか。



底野が、また前場と同じやうに寝轉んで雑誌を讀んでゐる。夕方である。玄關の格子が開いて、癡兵帽をかぶつた男がはひつて来る。

男 御免。

底野 どなた？

男 かういふものですが、義務として、ひとつなにか……。

底野 なにをひとつですか。

男 絆創膏、又は征露丸……。

底野 薬ですか。薬は、一向、用がないんでね、家では……。

男 ですから、國家のため犠牲を拂つた同胞への慰問と考へられて……。

底野 何處にゐるんですか、その同胞つていふ人は……。

男 われわれがその一人です。

底野 (起き上り) あゝ、さうでしたか。これは失禮しました。(玄關へ出て、丁寧に膝をつき) あなたがなんですか。それはそれは……。 (考へて) まあ、どうぞ、お上り下さい。少し散らかして頂けますけど……。

男 いや、こゝで結構です。

底野 いや、そこやいけません。絶対にいけません。苟くも國家のために犠牲を拂はれた同胞の一人に對して、そんな待遇はできません。さあ、どうか……。それとも、おからだに、どこか御不自由なところがおありですか。靴をお脱がせませうか。

男 いや、それには及びません。ぢや、ちよつと、こゝへ掛けさして貰ひます。えゝ、この證明書にもあります通り……。

底野 (それをさつきから讀んでゐる) はあ、僕、これくらゐのものなら讀めますから……。なるほど、間違ひはないやうですな。

男 はゝゝゝ。どうも、近頃、偽物が横行して、われわれは迷惑しとるです。

底野 本物はやりきれませんな。

男 何しろ、戦争當時乃至直後に於ては、世間も出征軍人とか、名譽の負傷者とか云つ



て、ちやほやしてくれますが、だんだん時日が経つにつれて、熱が冷め、忘れ勝ちになり、たうとう、振り向いてもくれないといふ有様です。

底野 よくしたもんですな。人間の冷やゝかさは、戀愛の末期にだけ現れるんぢやありませんね。

男 所謂、癡兵、今日では別の名前がついてをりますが、その方が通りがよくて重寶です。この癡兵などに對する社會一般の態度は、日に日に、無關心を通り越して、一種の輕蔑反感にまで達してゐる。これは、われわれ一同の甚だ心外とするところで、かの戰場で、生命の一つ手前までを捧げた勇士の末路として、かくあらねばならぬかといふ疑ひをもつんです。

底野 御尤もです。失禮ですが、日清ですか、日露ですか。

男 わたしは日露です。得利寺の激戦で、この通り、片腕をもぎ取られました。わたしなどはまだ仕合せな方で、今、この向ひ側を廻つてゐる男などは、兩腕と片足を奇麗に浚はれちまひました。これは奉天です。

底野 悲惨ですな。今度の事件などでも、大分、あなた方のやうな人ができたでせうな。

男 できたでせう。しかも、みんな、われわれと同じ運命に陥るわけですが、本人たち

は、今は、これを知らずにゐるでせう。病院で次ぎ次ぎに来る慰問者の花束に囲まれてゐる間は、そんなことに気がつかないんです。三年、五年、十年後の饑<sup>う</sup>じさ、恥しさ、無念さは、夢にも想像してゐないでせう。

底野 國家は何をしてゐるんでせう。新聞は眠つてゐるんですか。富豪は何處へ金を撒いてゐるんです。

男 あなたのやうに云つて下さる方は、まったく稀しいです。

底野 稀しいことを、僕は悦びません。僕は、日本でたゞ一人、あなた方への義務を忘つた人間として、激しく非難されることをすら望みます。あなたは、この得利寺の激戦で、何隊に屬してをられましたか。

男 野戰砲兵第三聯隊第二大隊第四中隊第一小隊第二砲車照準手です。

底野 長いですな。そして、その激戦の様、並に、あなたの御活動振りは？ 照準手だとすると、さぞ猛烈に視<sup>み</sup>ひを定められたでせうな。

男 決めましたとも……。かういふ境遇で、自分の手柄話などするのは、あまり感心しません、わたしの中隊長栗屋大尉は……。

この時、表から呼ぶ聲。「おい、早くしろ。来るぞ、来るぞ」



男は慌て、薬をしまひかける。

男 何れまたこの話は、この次の機会に……。どうです、この絆創膏を一つ……二十銭です。

底野 いや、折角ですが、絆創膏はあんまり……。注射は自分でやらないもんですから……。

男 傷をされた時には如何です。

底野 傷をするくらゐなら、針で縫ふぐらゐのやつをやるのですからなあ。

男 早くして下さい。征露丸を一袋、それぢや……。

底野 征露丸つてやつは、僕の知つてる車屋が買ったつていふんですが、あんまり効果らしいですな。熱なんか、なほ高くなるつていふぢやありませんか。

男 そんなことはありません。さあ、早く願ひます。連れが待つてますから……。これが三十銭……。

底野 もうなにか、ほかに變つたものは……？

男 これだけです。さあ、どつちでも……。頻りに後ろを振り返り、不安な様子を見せる）  
いらないますか。

底野 もう少し考へませう。

男 勝手にしやがれ。(さう捨白を残して、逃げるやうに立ち去る)

底野、あつけに取られ、元の位置に歸り、ごろりと寝轉がる。

底野 勝手にしやがれ。云はれなくてもさうするより外はないが、あゝいふ人間を作つたのも、かういふ人間を生んだのも、これ、もともと人間の罪だ。征露丸を押し賣りするのも、それが買へないで、つまらんお喋舌をするのも、國を思ふ同胞の淺ましい姿だ。おや、何時の間にか飛田の調子が出て來やがった。寝起きを俱にするつていふのは恐ろしいもんだ。

この時、飛田が、洋服を泥だらけにして歸つて來る。

飛田 やあ、今日は、ひどい目にあつたよ。

底野 どうしたんだい、その洋服の柄は？

飛田 危く貨物自動車に轢き殺されるところだつた。側に溝がなかつたらおしまひさ。

底野 犬も歩けば溝に落ちるか。

飛田 癡兵は寝て待て！ こん畜生。



その翌朝、底野と飛田とは、何やら朝食らしいものを終つて、互に悄氣きつた顔を見合つてゐる。

底野 瘠せたよ、トンビ、貴様も。

飛田 その眼玉の黄色いのは、やい、カマボコ、只事ぢやないぞ。榮養不良から來る黄疸だ。

底野 貴様はたまに外で何か食ふから、榮養佳良だとしても云ふのか。なんでもいゝ。せめて、たまに散歩ぐらゐはせんと、これで、下駄にだつて氣まりが悪いや。

飛田 ほんとに、少しは外の空氣を吸へよ。折角あんなにあるんだからさ。金のかゝらんもんでいふのは、當節、めつたにありやせんぜ。第一、家の中にばかりゐちや、幸運はともかく、自然の恩恵を無にするも同然だ。場所は選ばれた郊外だ。季節は春秋と限

つてはゐない。冬の武藏野は、葉の落ちつくした榎の木立に、昔ながらの詩があるのだ。

底野 よせやい、詩を作るなあ。さうまでしなくつたつて、おれや、出掛けるよ。巻煙

草の長い喫ひさしでも拾や、損得なしだ。

飛田 おれは、今日は休むよ。家にゐるよ。

底野 人聞きのいゝことを云つてやがらあ。何處を休むんだい。家にゐたつて誰も心配しやしないよ。變な棒つ杭にぶつからないだけでも安全だ。

かう云ひ捨て、底野は表の方へ出て行く。

飛田は、昨日まで底野がやつてゐたやうに、座蒲團を二枚並べ、その上に寝ころがる。

やがて、彼は起き上る。どうも寢心地がよくないと見えて、いろいろ寢返りを打つてみる。

また起き上る。部屋の中を歩きまはる。しかし、思ひ切つて、また寢ころんでみる。

この時、障子の間から、一羽の小鳥が部屋の中に飛び込んで來る。彼は、それを眼で追つてゐるが、やがて起ち上つて、一隅に追ひつめ、そつと兩手で捕へる。

飛田 これや、鶯だ。何處から飛んで來たんだらう。

彼はさう云ひながら、勝手から目筈を持つて來て疊の上へふせる。

飛田 鳴いてみる、こら。ホ、ホ、ホケキヨ。ホ、ホ、ホケキヨ。かういふ風に鳴いて



みな。駄目だ、こいつはまだ學校へ行つてねえや。

そこで、鶯のことは忘れたやうに、また寝ころがつてゐる。

しばらくすると、鶯は、巧みな聲で、一と聲鳴いてみせる。

飛田 おや、今頃鳴いたな。學校へ行かないつて云はれて、むつとしたな。よしよし、もうそれでいゝ。あんまり鳴くと、今度は、商賣人上りだつて云はれるぞ。

鶯は、また、一と聲、續いて二た聲、三聲、鳴き續ける。

飛田 よし、わかつた、わかつた。いゝ喉だよ、お前は。おれは、今、折角家の中にあるんだ。梅林ん中を歩いてるやうな氣持にさせてくれるな。

鶯は、なほ鳴き止まない。

飛田 よせつたら、よさないか。聴きたくないときは、ガリクルチでも聴きたくないんだ。ぢや、もう、出てつてくれ。歸つてくれ。伊太利へでも何處へでも飛んでつてくれ。

さう云ひつゝ、目筈を開けようとする途端、表に聲がする。——『御免』

飛田 (目筈をそのまゝにして、玄關へ出る) どうぞ。

宗匠風の、又はそれを氣取つた老人がはひつて来る。

老人 突然、誠に失禮ですが、お宅では、鶯を飼つておいでになりますでせうか。

飛田 カマボコの稱ある所以だ。中學で羽目板の前に立たされたことが、抑も貴様の一生を決定したんだ。

底野 おい、トンビ、兄貴のどれかにさう云つてやつて、また五圓ばかり送らせろよ。

おれの方は、月末まで、まだ三週間で間があるぜ。

飛田 惜しい話をしてやらうか。おれは、さつき三百圓つていふ……ものをだよ、この手の中に握つたんだ。

底野 巫山戯るない。出してみろ。

飛田 それが、もうないんだ。人が持つてつた。

底野 なんだい、一體、そのものつていふのは……。

飛田 鳥だ。

底野 三百圓の鳥？ 手の中へ握つた？ 夢かい。

飛田 夢でも幻でもない。なるほど、あの聲を聴いた時、これは曲者だと思つたよ。日

本一の名鶯だ。

底野 メイオー？ オーは……。

飛田 鶯だ。



底野 それが？

飛田 そこから、かうだ。それで、これだ。(外から飛び込んで来て、それを捕へた有様を手つきで示す)

底野 それで、これとは？(指を三本出してみせる)

飛田 これが、かう、かう、かう、かうさ。(老人が来て、見て、受け取つて、歸つたといふ恰好をする)

底野 なんだい、わからん。

飛田 飼主が、聲を聞きつけて、受け取りに来たんだ。

底野 無條件で渡したのか？

飛田 条件はつまり、その、糞なんかたれないうちに持つてつて貰ふといふだけさ。

底野 だから貴様は、外へ出てろだ。

飛田 そいぢや、カマボコだつたら、どんな条件をつける。

底野 三百圓の代物なら、一割乃至二割は謝禮として要求するさ。

飛田 さういふものとは知らず、いきなり、さあさあお持ち歸りをと云つた場合は……  
……？

飛田 (驚いて)はあ、いゝえ、實は、今、そこにゐましたら、外から部屋ん中へ飛び込んで来たもんですから、つかまへて目筈に伏せといたんです。

老人 それでは、ちよつと、そいつを拜見さしていたゞけませんでせうか。實は、只今、餌をやつてをりますと、何に驚いたのか、いきなり籠から飛び出しまして、なんでもこちらの方角へ飛んで参つたんです。不斷、非常に手前には馴れてをりますし、そんなことは決してなかつたんですが、どうしたのですか、今日に限つて……。

飛田 あゝ、さうですか。それは御心配でしたらう。今、鳴いたのをお聴きになつたんですね。

老人 えゝ、それがもう鳴き聲を聴きましたゞけで、それといふことはわかりはいたしますんですが、いきなりさう申上げるのも失禮と思ひまして……。

飛田 いや、もう僕の方は、そんなに遠慮をしていたゞかなくつても、どうせ誰かに持つてつて貰ひたいくらゐですから……。

老人と飛田とは協力して目筈から籠に鶯を移す。

老人 どうも、誠に有りがたう。これでどうして、その道の人にかゝつたら、この鶯、わたしの手には戻りません。これでも、人はなんと申しますか、わたしとして一番丹誠



をしてこゝまでにした鳥ですから、今逃げられては浮ばれませんや。去年の品評會には、お蔭で一等を取りましたな。あなたのお人柄を見込んで申上げるんですが、これで時價三百圓といふ代物です。やあ、どうも、ほんとに助かりました。何れ改めてお禮に伺ひますが、わたしは、あの原の向うにをります宇部と申す隠居でございます。

飛田 (なんと返事のしやうもなく、たゞ、相手の一言々々に頭を下げてゐる)

老人 では、御免下さい。お宅には二つ表札が出てをりますやうですが、あなたは……。

飛田 僕、飛田の方です。

老人 はあ、トビタとお讀ませになりますか。なるほど、や、それでは……。

老人去る。

飛田 (再び座に歸り) 三百圓か。えらい驚もあればあるもんだなあ。あの鳥が紙幣かなんかなら、一寸悪心を起すところだ。やれやれ、紙幣に羽根が生えたとはこのことを云ふんぢやないかな。

そこへ底野がぶらりと歸つて来る。

底野 やつぱり外は、廣すぎて落ちつかん。木ならば飽をかけた木でなければやおれの性に合はん。

底野 渡してからでも遅くない。

飛田 しかし、こつちからは、そんな態度を見せない方が奥床しいよ。堂々としてるよ。

底野 いくら言ふことが堂々としてゝも、その扮りぢや人が信用しないよ。却つて、奇麗なことを云ふ方が、物欲しさうだよ。坊主にお経料を訊ねると、へゝお思召でといふやうなもんだ。

飛田 おれは、おれのやつたことを後悔してない。現に、なんにも云はないのに、何れお禮に伺ふと云つてた。

底野 そんなことが當てになるかい。温泉場で玉突の相手をした男だつて、東京へお歸りになつたら是非お遊びになんて云ふよ。

その時、表で、若い女の聲。——『御免遊ばせ。』

底野 (飛び上るやうに) 来たぞ。

飛田 (落ちついて) 取次げ。

底野 (玄關に出る) どなた様で……。

女 (丁寧に辭儀をして) わたくし、原の向うの宇部から使に參つたものでございますが。



底野 あ、あの、驚の……？

女 さやうでございます。あの、飛田さまとおつしやる方は、只今……。先程、主人が伺ひました節、お目にかゝりましたさうでございますが……。

底野 あ、それならをります。(飛田の方に眼くばせをする) 實は、わたくしです。先程は失禮しました。わざわざ、どうも御丁寧に……。

女 それにつきまして、主人が自分で出向きます筈でございますが、却つて業々しく思召すといけませんので、大變失禮でございますが、これを、ほんのお禮のしるしに差上げて参れといふ申附けでございます。どうかお納め下さいまして……。

底野 なんです、どうも、そんなことをしていたゞくわけはないんですが……いや、折角のなんですから、なにいたしますが、このまゝ、なんですか、なにしてくまひませんか。

女 はあ、どうぞ……。ではごめん遊ばしませ。

女、去る。

底野 (奉書に包んだものを飛田の前で開く)

飛田 おれに開けさせる。

底野 (そばから紙幣を數へ) 一、二、三、四、五……。もう一枚ないか。

飛田 ない。

底野 五十圓か。相當だな。

飛田 どうだい。やつぱり、おれが不斷云ふ通りだ。

底野 うむ、これや成功だ。

飛田 降参したか。おれの主義をもう一度聽かしてやる。犬も歩けば……。

底野 え？

飛田 む？

底野 可笑しいな、少し。

飛田 なるほど、變だ。犬も寝て待てば……か。さうでもないな。

底野 (思ひつき) やあ、どうだい、こいつは、やつぱり、おれの勝ちだ。その金は、おれが手に入れたも同然だ。どら、貸してみろ。

飛田 (むきになり) 待て。果報は寝て待て。お前は寝てたか。

底野 (ぐつとつまり) む？

飛田 かういふのは、どういふことになるんだ。金を得たのはたしかにおれだ。おれの



運だ。

底野　しかし、その金を得させたのは、おれだ。おれの主義だ。貴様は、おれの方針を守つて寝てゐたんだ。

飛田　それぢや、犬は、歩かずに寝てゐても棒に當るんだ。萬歳、萬歳。  
底野　果報は歩きながら待てだ。萬歳。さあ、出掛けよう。

兩人、勢よく起ち上る。

稿別  
牛山ホテル



牛山よね	ホテルの女將
同とみ	よねの養女
藤木さと	眞壁の妾
石倉やす	佛蘭西人の妾
眞壁	S 商會出張所舊主任
三谷	S 商會出張所新主任
三谷夫人	
鵜瀬	S 商會社員
島内	同
金田	金田洋行主
岡	寫眞師
納富	劍道教師
ロオラ	別居せる眞壁の妻

その他、ボーイ、車夫、水夫、女等

佛領印度支那のある港

九月の末——雨期に入らうとする前。  
 港に近く、佛國人の住宅地と、所謂「アナミット」の部落とに接する一區劃、その中心にあ  
 る日本人經營のホテル。



ホテルの帳場兼女將の居間——疊が敷いてある。

前面一段低く、椅子、テーブルを置いた土間。

右手に玄關を兼ねた撞球場に通ずるドア。左手は二階に上る階段と、食堂の入口。正面は大きな窓。そこから波止場の一部と水平線が見える。

日が暮れようとしてゐる。

とみ(十九)が、風呂から上つて、化粧をしてゐる。

やす(二十九)は、腹這ひになつて雑誌を讀んでゐる。

二人とも白木綿の袴に腰巻だけをしてゐる。

さと(二十四)が、土間の上り口に腰をおろして、ぼんやり窓の外を見てゐる。これは、浴衣がけである。

さと 船はもうさつきから、著いとるのに、なにしとるとだろかい。

とみ ベル・ビユウで茶でも飲んどるとたい。

やす 檢疫で止められとるとだろ。上海から來た船はやかましかもん。

とみ ほんに、コレラのはやつとると、だつた。おやすさん、風呂へ入つてこんな……

やす 今日、やめとかう。

とみ 無精もん！

やす 東京の奥さんに見てもらへばえ、印度支那にどげな別嬪がをるか……

さと 船のつく日はいやいや。なんにも手につきやせん……

やす あんたが、また、何を待つとるとな？

とみ ムツシユウ・眞壁たい、きまつとるぢやなツか。

やす 今まで其處へをつた人間ば、誰が待つもんか。

とみ そんなら誰や。

さと ……………

やす 今度來る主任さん、あんた、名前ば覺えとらんかい。

さと ムツシユウ・三谷……



やす さうさう、今朝、八號に行つたりや、そのムツシユウ・三谷のことで、みんな大騒ぎだつた。

とみ 奥さんば連れて來つて……。

さと そら善かばつてん、わしがこと、なんか云ふとりやせんだつたかい。

やす あんた位、運のよか人間は少なくて云ふとつた。

さと さういふことぢやなかと。あつちのおツ母さんが、わしのこと悪う思ふとりやせんかしらん……。

やす どうしてや？ たゞ、かうは云ふとつた。——あの娘が、もうちつと、家できばつてくるよと、よかばつてんがアて……。

さと さういふ相談ば、もちかけられたばつてん、わしや斷わつた。そんなこと云ふたて、今から、いくらなんでもなあ……。

やす そらさうたい。尤も、わしなら、わかりやせん。そこがあんたと違ふところたい。

わしや、今の男と別れたら、また八號にでもごろごろしとつて、代りのムツシユウ・フランセばつかまゆつたい。今更國なんぞに戻つて、苦勞する氣にやならん。

ロオラ (三十) がはひつて來る。猶太系の佛國女、かなり贅澤ななりをしてゐる。

さと、慌てゝ起たうとする。

ロオラ (眼ざとくそれを見つけ) もし、もし、あなた、眞壁と一緒にゐる方でせう。眞壁に會はせて下さい。

さと (そこへ立ちすくんだまゝ返事が出來ずにゐる)

とみ ムツシユウ・眞壁、をらんばい。今、棧橋に人ば迎ひに行つた。

ロオラ うそでせう。あなた方、みんなうそつきです。わたし、あの人に澤山話したいことがありますから、どうしても會ふんです。

とみ をらんけん、をらんでいふとた。嘘と思ふなら、部屋でもなんでも見て來つとよかた。

やす ほんなこと、棧橋に行つとるけん、見て來なつせ。天草丸の著いとる棧橋ぢやけん。

ロオラ 店の方へ行つても、會へません。何時でもゐないつて云ふんです。此處へは來たくありませんけれど、しかたがありません。

やす わからん人ね、あんたも……。アレ・ポワル・オ・ケエ。ムツシユウ・エ・ラ・アベク・マダム・ウシヤマ。セ・セリユウ。



ロオラ *C'est pas vrai!* (かう云ひながらどんどん二階に上る)

とみ よかつかい。あんなことさせて……。

やす 可哀さうに！……。

さと 裁判な、まだ片づかんとかしらん……。

やがて、ロオラが降りて来るが、そのまま出て行つてしまふ。

やす ムツシユウ・眞壁が日本に戻るて云ふけん、慌て出したツだらう。あんたの面ば、善う覺えとつたなあ。

さと たつた一つペンなるばツてん、會うたゝあ。

とみ こないだ、おツ母さんにあんたのこと、いろいろ訊いとつたえ。結婚したかと

か、子供が出けたかとか、なんとか、かんとか……。

やす 雲南の山ん中は、寂しかばい。好いた男となりや、あぎやんとこへ行つて、暮す

こつたい。吝氣しようとしても出來んし……。丸一年、自分の國の言葉ば使はんで居つ

て見ろな、あんた、どぎやんあると思ふ？ 君が代かなんか歌いたうなるばい。

とみ 日本語ば、教ゆるとよかろてえ、旦那に……。

やす あんたゝちと話すやうにや行かんたい。そんなら同じこつたもん。(起ちあがり)

どら、風呂へいつて來う……。(出て行きながら) 一番の蚊帳、早うまた吊つとかんと、お  
ツ母さんに怒らるゝばい。

とみ 今日に入らんでいふとつて……。

(起つて、これも二階に上る)

岡 (三十二) 寫眞機を提げてはひつて來る。神經質らしく、一種の畸形的體格をした男。

岡 (さとを見つけ) あんた、ひとりかな。

さと 誰に用のあると？

岡 實はあんたに……。なんて、別に用と云ふわけぢやなかばツてん、寫眞ば一枚、撮  
らして貰はうて思ふち……。

さと わしや、この土地にをる間は、寫眞なんぞ撮りたうなかと。

岡 どうして？

さと 誰でもさう云ふとるけんたい。

岡 何處で……八號でかい？ ところが、さういふとつて、みんな撮つてますよだ。お  
花さんが、先月キヤビネを撮つたし、お千代さんは、こないだ、大型を寫したし、それ  
で、みんなには内證だつて云ふんだから、をかしかよ。妙な癖ば、つけたもんたい。



さと ほうら、そぎやんいふて、あんたが喋つてしまふけん、好かん……。

岡 あんただけは特別、黙つとつてあげる。それに、あんたは、もう、あすこにやをらん女なんだもの。むつかしかこと言はんでちやあ、一枚寫しておきなはりまつせ。かう云つちやなんだが、九州へんにや、僕ぐらゐの寫眞屋はゐせんばい。

さと そぎやん威張るなら、お千代さんの寫眞は見せちみなはり。どぎやん寫つとるか。

岡 お千代さんとあんたとは、違ふたい。寫眞は實物次第ですからな。

さと 今度来る三谷さんていふん奥さんば、寫させて貰へばよかたい。

岡 それはそれ、これはこれ、商賣と好意とをこつちやにしないで下はり。あんたなら、たゞで寫さうて云ふとたい。

さと そぎやんこといふとつて……。

岡 冗談ぢやなかばい。あんたが、ムツシユウ・眞壁と二年間一緒に暮したのも、商賣氣を離れてのこと、僕があんたの姿をカメラに納めて置きたいと希ふのも、これや、寫眞師岡ながしとしてぢやなかです。金もなく、名もなく、印度支那三界に果敢ない戀を追ふ日本人の、最後の心癒せです。

さと ……。

岡 そぎやん顔して、なんたいな。とつけむにやあ(見つともないの意)。おさとさん、わらくしや、これでも、眞面目ですばい。あんたは、明日から自由なからだぢやありませんか。

さと ……。

岡 兎に角、二三日うちには、自由なからだになるとだらう。たつた一年でよか。僕の傍にをつて下はり。一年が永すぎれば一月でもえ。一と月、國へ歸るとば、延びやあち下はり。なあ、おさとさん、後生のお願ひぢや。

さと ……。

岡 ムツシユウ・眞壁には金がある。僕にはないばツてんが、僕には、ムツシユウ・眞壁にはななかもがある。あんたは、男の眞心といふものを知つとりますか。愛する女のために、命でも差出すといふ男の眞心を……。必要な時は、金で縛つて置く。用がなうなれば、金をやるから出てゆけ。これが男の眞心たいな？ 成程、そのお蔭で、あんたは、五年の年期を三年あまりで済ますことができ、その上嫁入りの支度金まで持つて、お父つあんの傍へ歸れるて云ふかも知れん。しかし、それがなんたいな？ あんたは、ムツシユウ・眞壁と、さういふ風に平氣で別れられるぢやなかですか。



さと 平氣……？ どうしてそげなこと云はるツとな？

岡 どうしても別れられんと云ふぢやなかでせう。

さと そげなこと云ふても、しよんなかもね。

岡 つまりそきたい。しよんなかやうにさせたのは誰な？

さと もう、わかつとるけん、やめて下はり。わしも、馬鹿ぢやなかけん……。

岡 さうですか。それぢやしよんなか。寫真だけ撮らせち下はり。記念に一枚……。

(寫真機を出しながら) そのまゝでよかな？

さと そんなら、着物ば著換へち來るけん、待つとつてな。(急いで階段を昇る)

岡は寫真機を程よき處に据ゑ、撮影の準備をする。

この時、ホテルの女將よねを先頭に、鷓瀡、眞壁、三谷夫妻、島内、金田などが、どやどやはひつて來る。

岡は驚いて、寫真機を引抱へる。

よね(五十五)——太つた女、無造作なつくり。何處となく、苦勞人らしい、さつぱりした女。

鷓瀡(四十二)——毛深い、眼のどんよりした男。酒飲みのだらしなさ。

眞壁(四十)——がっしりした、活動家らしい、幾分荒んだ風貌。無表情。

三谷(三十七)——秀才型の紳士。固苦しい氣取り。

三谷夫人(二十六)——内地ではざらに見る現代風の若夫人型。和服でエエールをかぶつてゐる。

島内(二十五)——事務員らしい地味な青年。

金田(四十七)——植民地の小商人タイプ。不似合な口髯と眼鏡。

よね (岡を見て) そぎやんとところで、あんた、なにしようよ？

岡 (何やら口の中で云ふが聞えない)

よね (大きな聲で) 誰もをらんとかい、こゝにやあ……？

食堂の方から、だるさうに、土人のボーイが現れる。

よね ムツシユウのバガアジ・アボルテ・アン・オオ。コンブリ？

ボーイ モア・パ・モアイヤン。

よね プルコア・パ・モアイヤン・エン？ トワ・ツウジュウル・マラアド。アロオル・

ヴァ。オン・ガルドラ・パ・トア。コンブリ……？

三谷 なんていふの。



よね しょうんなかですたい、アナミツは……。支那人の方がよつぽど役にたちますばい。

眞壁 荷物は店のボーイにやらせるからいよ。奥さん、お疲れでせう。部屋でおやすみになつたらどうです。もういゝんだらう、婆さん。

とみが二階から降りて来る。

よね (とみに) 部屋の方はもうよかゝい。

とみ あゝ、よか。

よね そんなら、どうぞ……。

岡 (三谷に近づき、名刺を差出しながら) 私、かう云ふものです。どうかよろしく。

三谷 あゝ、さうですか。へえ、こんなところに、日本人の寫眞屋さんがあるとは思はなかつたね。や、これからいろゝまた……。

岡 (三谷夫人に會釋しながら) 是非一度、そのうちに……。

三谷夫人 ほんとに……。 (夫に) ねえ、あなた、船の中で撮つたのを願ひしたら……。

(岡に) 現像もなさいますんでせう？

岡 はあ、何でも致します。

三谷 まあ、後にしよう。出すのが面倒臭い。

三谷夫人 どうせ駄目かも知れせんわ。

眞壁 (三谷夫人に) そいぢや、どうか……。 (先きにつつ)

よね、三谷夫人、三谷の順にその後につゞく。

よね (階段を昇りながら) 今日はボーイが寝とるもんですけん……。

眞壁 二日ぐらゐでも、船はあれで、なかなか疲れますよ。

三谷夫人 あら、そんなでもございませんの。香港でゆつくり休んで参りましたし、海

がそれや静かで……。

眞壁 (聲だけ聞える) 社宅の方は、もつと場所もよし、建物もしつかりしてゐますよ。

やすが風呂から出てくる。

やす なにしとるとな、みんなこげなとこで、ぼうつとして……？

金田 奴こそなんか、そげな太か脚ば、出やて……。おい、とみ公、コンニヤクを一杯

……。

鶉澗 おれにも……。

とみは戸棚から、コンニヤクの盥と杯を二つ出して注ぐ。



やす (岡に向ひ) それから、あんたは、どぎやんしたつ? 一體全體、誰ば寫したと…

岡 (聞えないふりをして) もう暗うなつたけん、今日はやめとかう。

鵜濤 (金田に) どうだい、今夜あたり、一番戦はさうか。

島内 今度の大将、うるさいぜ。

金田 なに、わしが引張り込むよ。

鵜濤 細君も一緒にか。だけど、一昨日の晩は、荒かつたぜ。MYの連中、青くなつてたよ。柴野の奴さん、歸りの旅費をみんなすつちやつたからね。

島内 小林だよ。太い奴は……。一晩に八百ピヤストルつていふのは、レコードでせう。

岡 ぢや、みなさん、お先きへ……。

岡が出て行くと、入れ違ひに、車夫と別のボーイが荷物を運んで来る。

金田 ぢや、今夜は何處で?

鵜濤 此處はうるさいから、おれんところでやらう……。飯は出さないよ。

金田 断わらなくつたつて、食つて行くよ。

島内 (とみに) おい、飯はまだか。

とみ 今日はどさくさして、遅なつたつてすばい。

島内 (食堂をのぞきに行き) なんだ、まだテーブルの用意もできてないぢやないか。

とみ そぎやんこつ、わしに云ふたてちや知らんけん。

島内 おれも、何處かへ家を借りよう。三度三度催促しなくつちや、飯を食はさないなら、人を馬鹿にしてやがらあ……。

とみ 今日は、きつと、御馳走のあるとばい。

島内 こゝの御馳走つて云へば鹽辛い茶碗蒸しにきまつてるぢやないか。

鵜濤 あいつを、まだ食はすかい。鶏のトサカまで刻み込んである奴だらう。

とみ あぎやんこつば云ふとる。

やす ほんなことぢやけん、しようんなかた。

金田 島内さん。今晚は、あたしが支那飯をおごらう。

島内 そいつあ、有難いな。

やす 金田さん、わしにや……?

金田 鵜濤先生、どうしたもんだらうね。



鵜濤 くせになるから、よしてくれ給へ。

やす あんたにや、頼みやせん。

鵜濤 三谷夫人つていふなあ、あれや、どつかで見たことがある。

金田 さういふ女は、よくあるよ。

鵜濤 おれは不圖、學生時代のことを思ひ出した。もう二十年も前のことだ。神田の下宿でごろごろしながら、幻の戀人にひそかな微笑を送つて居た頃だ。

金田 おい島内さん、出掛けよう。

鵜濤 まあ、聽け。

金田 面白くないよ、さういふ話は……。

鵜濤 さうかなあ、そいぢや、さよなら。

島内 荷物は、このまゝにしといていゝですな。

鵜濤 知らないよ。君が責任を持つんだよ。我輩は、主任の引越しなんか手傳ふ身分ぢやない。その爲めに、君つていふ申分のない祕書役がついてるぢやないか。君が居ないうちに、主任夫人の長襦袢が一著、鞆の中から消えてゐたつて、罪を我輩になすりつけちやいかんよ。

島内 (もぢもぢしてゐる)

やす よかばな、ムツシユウ・島内、わしが番しとつてあげるけん。行つて來なつせ。

金田 よし、よし、さういふ人も居なけれやね。ぢや、また後で……。

兩人出で去る。

鵜濤、コニヤツクを注いで飲む。

とみ 金田のハゲぢやん、善うなかな、毎晩ムツシユウ・島内ば引張り出やあち……。

鵜濤 やくな、やくな。

とみ 憚りさん、お門違ひですよだ。

やす (鵜濤に) なして人の顔ば見とつとな、そぎやん眼つきばして……。大好かん、馬鹿んごたる。

鵜濤 おや。

二階から、よねの聲が聞える。とみを呼んでゐるのである。とみはその方に行く。

鵜濤 どうだい、近頃、病氣の方は……。

やす もうちつと悪かことにしとくと。

鵜濤 早く歸つてくれつて云つて來るだらう。



やす 何時まで、も、さうしとれとは云はんくさい。

鶺鴒 浮氣をしろとはなほ云ふまい。

やす 云はんでも、するときやすするたい。

鶺鴒 つまらねえから、よさう。時に、おさとさんは、泣いてるか、笑つてるか。

やす 人のことばかり心配せんで、早う嫁御でも貰へばよかてえ……。え、年ばして、見ちやをられんばい。

鶺鴒 昨日、誰かもそんな事を云つたよ。おまへさんにや悪いが、おれんところで辛抱できるなあ、おやすさんくらゐなもんだつて云つた奴がある。

やす ふん。そげなこと云ふた奴の顔は見たか。わしや、辛棒ていふこたあ、大好かん。そのかわり、人がなんと云ふても、好いたこたあ、するたい。

鶺鴒 おれみないなことを云やがる。おい、もう空だぜ、この塚は……。臺灣、上海、西貢、新嘉坡……。それと、こゝにもう今年で七年……。好きなことは何でもやつて來たが、やつたことは好きなことばかりぢやない。お前さんだつてさうだらう。思ひ出してもいやなやうな男の顔が、二つや三つ頭の中にこびりついてるだらう。

やす ……………。

鶺鴒 おれだつて、かう見えて、月夜の晩に、西貢の植物園を、女に泣かれながら、夜通しうろつたこともあるんだ。

やす ……もうよかよか、胸の悪うなる……。

鶺鴒 變な持病だね、そいつあ……。さあ、また來よう。また來るよ、モン・プチ……。やす あゝ、またおいで、グロオ・コシヨン……。

鶺鴒は出て行く。やす一人になる。

やすは、暗くなつたあたりを氣にしながら、窓ぎわに行く。

汽笛の唸り聲。——長い沈黙。

やがて、よねととみが、二階から降りて來る。

よね (とみに) そんなら、早う行て來え……。 (やすに) 棧橋で二時間も立たされて、その上、こんだあ、税關がうるさうしてね。

やす ビボオつて好かんやつ。そぎやん時ばかり、役人顔して……。

よね それがさ、此の前、米ば積み出す時、ムツシユウ・眞壁の握らせ方が足らんだつたけんたい。さうだろたい。今までこんなこたなかつた。尤も、荷物が澤山ぢや……。やす それから、おツ母さん、昨日の話、どぎやんしようかな。バツケエの話……。



よね さういふこつていふもな、わからんやうで、何時の間にやら、知れるもんばい。  
わしや、やめたがよかるて思ふ。一と月や二た月、そぎやんことしてみたところで、幾  
らにもなりやせんぢやなツか。そりよりや、お前、はよう雲南さ戻つてやつた方がよか  
ばい。

やす おツ母さんな、こげなこたあ、なかなか堅かな。

よね うん。己、堅かばい。兎に角、きまつた男があつて、そげなこたあ、己にやでけ  
ん。そいで通してきたんだもん、これまで……。その方が身のためぢやけん。苦勞の無  
うてよかばい。病氣と云ふちやあ、こげえにして、ぶらぶら遊んどらるゝなあ、誰のお  
蔭かな。もうちつたあ、親身にならにや。あれでも優しか人ぢやなツか。

やす せからしか！（うるさいよ）

よね なにがせからしかもんか。

此の時、とみが駆け込んで来る。その後から、佛蘭西の水夫が、酔つばらつて追ひかけて  
来る。すると、もう一人が、それを止めようとして引張る。それでも、たうとうはひつて  
来て、今度は、そこにゐたやすの肩に手をかける。やすは、平手で、烈しくその頬を打つ。  
二人の水夫は、何か怒鳴りながら出て行く。

よね 八號と間違へたつたい。

再びロオラがはひつて来る。

ロオラ 今晚は……。眞壁、もう歸りましたか。

よね なにか用かな。

ロオラ 一寸、會つて話したいことがあります。さう云つて下さい。

よね あんた、ムツシユウに用のあるなら、辯護士に頼んだ方がよかでせう。アボオカ  
な……。その方がよかですばい。

ロオラ 辯護士、駄目です。眞壁からお金を貰つてゐます。わたしの頼むこと、聞いて  
くれません。

よね 裁判所の方はどうなりましたか。

ロオラ まだ濟みません。あの人、國へ歸ると、あと困ります。わたし、早くお金欲し  
いですから……。また、ペテルスブルグへ歸ります。今、お金、一文もないんです。

（ハンケチを出して涙を拭く）今朝から、なんにも食べません。

よね わしから、ムツシユウ、眞壁によう話して見てあげまッしゆう。あの人、悪か  
人ぢやなかですばい。日本人な、女の方でやかましよう云ふても、金は出しまッせん。黙



つとると、出します。(懐から紙入れを出し)一文もなうちや、お困りだらう。少なかば、つてん、これはとつて置きなつせ。(紙幣を一枚渡す)

ロオラ (それを受取り) ありがとう。merci, merci beaucoup! わたし恥かしいです。  
J'ai honte, vous savez, j'ai tellement honte!……(泣き入る)

ホテルの一室——寢臺が二つ並んでゐる。寢臺には蚊帳が吊つてある。

朝——電燈がついたまゝになつてゐる

さと は、髪を結つてゐる。

眞壁 は、まだ寢床の中で新聞を讀んでゐる。

さと わしや、今晚の會にや、出んでもよかでせう。

眞壁 出た方がいゝ。おれたちは、誰に憚るところもない間柄だ。

さと それでもねえ……。

眞壁 お前は、三谷の細君に氣兼ねをしてるんだらう。お前だつて堂々たる眞壁夫人だ。長く一緒にゐるわけぢやなし、あと一日で、もうあの先生たちと顔を會はすことなんかありやしないんだもの……。



さと そぎやんこと云ふと、また悲しうなるぢやありませんか。あと一日のなんのつて……。

眞壁 お土産はもう揃つたか。

さと はい、ぼつぼつ集めとります。

眞壁 おれも、此處の店を無事に勤め上げたのなら、お前にも、もつとなんとかしようがあるんだが……。

さと あつちの方も、まだ、片がつかんとかなあ。

眞壁 そんなことを、お前が心配しないでつていよ。

さと そらあ、わしが心配したてちや、なんにもなりやせんばつてん……。どうせ、奥

さんぢやなかつちやるけん……。

眞壁 さうだ。世の中の奥さんたちみたいに、男の苦勞まで脊負ひ込む女になつちやおしまひだ。女は、自分だけで脊負ひきれなくらゐの苦勞があるんだからな。

さと また髪が抜け出した。困つてしまふ。

眞壁 おれは、あのロオラといふ女に、十年間苦しめられた。今迄、お前も訊かうとしなかつたから、おれは云はなかつたが、おれと、あの女とは、抑々、お互に、欺し合つ

てゐたやうなものだ。おれが露西亞大使館で副領事をしてゐた頃、佛蘭西語の教師に雇つたのが、あの女だが、二人は、別々の目的で一步一步近づき合ひながら、表面は、世間並の戀人らしい眞似をしはじめた。よく云ふ、自分でかけた筈に自分で引つかつたといふ奴さ。これもざらにある結婚の型だ。あいつは、おれの眼を盗んで、金を溜める。おれは、あいつに内證で女をこしらへる。大使館をやめて、此の土地へ舞込んで来てから、おれたちは、同じ檻の中で噛み合ふ獸のやうな生活をし續けた。愈々辛棒ができなくなつて、二人は別々の家に住むことにした。それから、お前が知つてゐる通りだ。離婚の訟訴は向うから起したのだが、こつちにも、慰籍料ぐらゐ請求する理由は十分にあり。だが、まあ、これは、世の中の夫婦といふものが、お前たちが考へてゐるやうに、單純なものぢやないといふ證據に云つて聞かした迄さ。國へ歸つたら、おとなしい、よく働くお婿さんを早く見つけるやうにするのはいよが、わけのわからん男なんか、甘つたるい誘ひを眞にうけて、うつかり一生を託する氣になると、それこそ、取りかへしがつかないよ。男からは、愛情を求めるかはりに、愛情のしるしだけを貰つて置けばいい。わかるかい、おれの云ふことが……？

さと

………。



眞壁 そんなに、ちつとして聴いてないでもないよ。さつさと髪を結つてしまへ。

長い沈黙。

さと わしや、今度あんたから貰ふた金で、お父ツつあんに、小あか店ば出さするつもりですたい。近所に酒飲みの多かけん、酒屋が一番よかて思ひます。

眞壁 さうして、賣るお酒は、みんなお父ツつあんに飲まれてしまふんだらう。そいつあ、やめた方がいゝね。實を云ふと、おれは、お前をまたお父ツつあんの手に戻すことはあぶないと思つてるんだ。今もつてる二千圓の金を飲まれちまつて、もうあと二千圓こさへろと云はれたらどうする。また、こゝへ舞ひ戻つて来るか。さうして、今度は、おやすのやうに、身動きができなくなつた上に、恐ろしい病氣までうつされるか。さうなつてから、おれに相談しようつたつて、おれはその時分、何處にゐるかわからないよ。何時も云ふやうに、おれにはおれの仕事がある。あと一日で、おれはお前のことなんか忘れてしまふんだ。はつきり云つとくよ。お互に心残りはない筈だ。何時までも別れた人間のことを思ひ出すなんてことは、おれの性分ぢやない。お前は、誰のことも考へないで、一人で、自分の運命を切り開いて行け。おれも、今度の仕事で、店に二十萬といふ穴をあけたが、これで、どうやら商賣人らしい度胸もついた。おれにも、新しい未來

が見え出して來た。二千噸の鹽が、あの大雨に流れ去つた光景は、おれの過去四十年を葬る痛快な儀式だ。

さと わしや、さいぜんから不思議でならんと……。それてちや(だつての意)、あんたが、いろいろなこと云ひなはるとば、聴いとつて、それば、自分に云はれとるやうな氣のせんとだもね。

眞壁 なるほど、それがほんたうかも知れない。おれは今、お前のことより、自分のことを餘計考へてゐる。お前にもそれがわかるのだ。今日のピクニツクは、お前の送別會だつて云ふが、男は誰々が行くんだ。

さと はじめは、男を一人も入れんつもりだつたりや、鶉濤さんがどうしても行くて云ふてきゝまつせんと。ぢやるけん、あの人だけですたい。

眞壁 八號の女たちもみんな行くのか。

さと はい。

眞壁 また何時かのやうなことがあると厄介だから、運轉手に酒を飲まさないやうにしろ。

さと はい。それでも、鶉濤さんが、きつと相手をさすぢやる。今晚の宴會は六時から



だて云ふとだつて、それまでに戻らるゝか知らん……心配なことぢや。

眞壁 三谷の方の世話は島内だけで大丈夫かね。

さと 三谷さんつて云へば、あの奥さんね。

眞壁 どうしたつて……？

さと わしのこつば、奥さまて云ふとばな。

眞壁 だからいゝぢやないか。

さと それでも、なんだいろ可笑しか。昨夜、食堂でかう云ふて尋ねツとですばい。

「あの、奥さまも、社宅の方につつといらつしたんですか」つて……。

眞壁 それで……？

さと な、をかしかでせう。わしや、なんて云ふてえゝかわからんだつたけん、「いゝ

え、はあ、ちよつと」……こぎやん云ふといたと。

眞壁 「いゝえ、はあ、一寸」か……。社宅にお前がゐちやいけないのか。

さと いかにも悪かごつ云ふとぢやもね。それから勝手の工合なんかどぎやんですて訊

くと……。 「コツクに委せきりですよ知りません」……こぎやん云ふといたと……。

眞壁 そんなこと、どうだつていゝよ。

さと (髪を結び終り、著物を著替へ始める)

眞壁 (これも起きて顔を洗ふ)

さと 朝御飯、部屋へ取寄せちやいかんか知らん？

眞壁 どうして……？ いゝさ。

さと 二人だけで食べる、これが最後ですもね……。今晚は宴会……。明日の朝は、忙

しうしてゆつくり出来んし、そんな上、六時ていふ時間に乗入込むんぢや、御飯なんぞ、

たべてをられやせん。

眞壁 (部屋の呼鈴を押す)

さと わしが、今さう云ふて來つてえ……。

やがて、とみが、現れる。

さと あ、濟まんばツてん、御飯ば、こつちに持つて來てもらをごたる。今朝は、こゝ

でたべるけん……。あ、それから、あらあ何時もの通りなるばツてん、コンニヤクば、一

杯づゝ附けて來てくれんかい。

とみ 蠟共持つてくれればよかなあ。

さと それでよか。今日は果物の新しかと、あるか知らん……。



とみ さあ、どぎやんだいろ、訊いてみゆうたい。

とみが去つた後、さとはしばらくその後を見送つてゐる。

眞壁 (笑ひながら) たうとう、コンニヤクがなほらなかつたね。

さと コニヤツク……。それでん、みんながさう云はんもんだるけん、わしだけコニヤツクてろん、なんてろん云ふと、可笑しかつてもね。

眞壁 少し、風が出て来た。明日は荒れなきやい、が……。

さと わしどんが、こつちい來ツときや、ほんに惨めだつた。船底へ菰ば敷いて寝かされたツだもね。支那人の苦力がいつばい乗つとつて、何處でんかしこでん、唾吐きちらきやあつ。それから、魚の骨でもなんでも、ベツベツて吐き出やつ。さうだるけん、わしども、御飯も食べる氣はせんだつた。暑うし臭うし、そんな、蠅のをつて、窮屈し、眞暗うし……。

眞壁 もういゝ、もういゝ、そんな話は……。そんなことばかり考へ出すもんぢやない。

世の中は、そんなところばかりぢやないんだ。廣い海を見る、廣い海を……。お前の國の方では、女ばかり働いて、男は遊んでるんぢやないか。

さと わしが國にをるときや、男でん女でん、遊うどるもんなぞ見たこたなかつた。

まあ、遊うどると云へば子供ぐりやんもんだ。

眞壁 さうでもなからう。

さと うちの父ツつあんてちやあ、あれでも、なかなか働き手ばな。たゞ、きばつてもなんにもならんだけたい、あんた。

眞壁 お前の話は、陰氣臭くつていかんよ。働いたつてどうもならんなんてことがあるものか。働き方がわるいだけの話さ。下手に働くといふことは働かないのと同じことだ。とは云ふがね、これは女には當てはまらない理屈だ。さ、また、催促しないと、二時間ぐらゐ待たされるよ。

さと わしが、行たツ見て来る。

さと、出で去る。

眞壁は、窓を開け放つ。かなり強い風が、カーテン、蚊帳などを吹き上げ、眞壁の著てゐるビジャマの前が、びつたり胸にくつゝく。彼は、長く伸びた頭髮を心地よげに後ろに靡かせ、風の眞正面に立つたまゝ、眼を細くして、海の方を見てゐる。

汽笛が長く尾を曳く。それに交つて、天主教會の鐘の音が、かすかに鳴り響く。  
長い間。



ヤがて、さとが、ボーイと共に朝食の膳を運んで来る。とみはその後から、コニヤツクの  
櫃を提げて現れる。

さと 窓の開いとるとかな。

眞壁 (黙つて窓を閉ぢる)

さと (テーブルの上を片づけ) さ、此處へ置いてくれな。

とみ あのな、今、岡さんが来てなあ、今日あの人も行くて云つとつた。寫眞機ばもつ  
て、わしどもば、みんな寫ういて呉うるツうてうたい……。

さと (腰をかけながら、一寸、眞壁の方を見た後) あぎやん人、來こんでも、よかこてえ……。  
(かう云つて、首をちぢめ、舌を出す眞似をする)

とみ それでん、只でよかて云ふとばい。

さと (ボーイが寢臺をしなほさうとするのを見て) ノン・ノン。パ・メントナン。アツブレ。  
(眞壁に珈琲を注いでやる)

とみ もう、用はなちぢやるかい。

さと もうなか。

とみとボーイ、出で去る。

眞壁とさととは、黙つて、食事をしはじめる。

眞壁は佛蘭西風の簡単な朝食、さととは和食である。

さと (思ひ出したやうに、コニヤツクの櫃を取り上げ) 注ぎまツしうか。別れの盃ですばい。  
わしもちつとばツかり……。 (杯を差し出し) はい、乾杯……。 ア・ポートル・サンテ……。

眞壁 (同じく杯を差し出し) ア・ラ・ヴォートル……。 (笑ひながら飲む)

さと これで安心した。そればツてん、なんだいろ、まだ、明日あした發つやうな氣のせん。  
どうしてだいろ。

眞壁 用意さへ出来てれば、それもいゝさ。お前が明日たつ。おれが、三日置いて、十  
一日……。なるほど、おれも、そんな氣はしないな。お前を送り出したら、おれは、そ  
の晩から、ベル・ヴユウへ移らうと思つてるんだ。こゝはどうにも我慢がならんよ。こ  
の木賃宿は……。婆さんは珍らしくいゝ人だが、ホテル經營の手腕はゼロだ。

さと そればツてん、これでなからんば、わしどもが氣樂きらくに泊つたりなしたりしちやを  
られんもね。普通の日本人には、これで丁度よかつばな。それにしても、あのおツ母さ  
んぢやけん、これでよかゝも知れん。誰でも、此處へ來る日本人は、ホテルへ來るとぢ



やなく、おつ母さんところへ来るとばな。頼めばどげなことでもしてくれるし、昔が昔だけに、わしどもが氣持ば一番善うわかつてくるつと……。そけえ行くと、八號のおつ母さんどもあ、うはべは親切で、氣のつくやうにみゆるばつてん、頼らうていふ氣ば起させんとばな。何處やら油斷のでけんていふ氣のしはせんかなあ。

眞壁　なに、此處の婆さんだつて、なかなか油斷はならないよ。おれは、お婆さんが、あのおとみといふ娘を、あの佛蘭西人に押しつけようとしてるつて話を聞いたよ。あゝして、身寄のない子を養女にしてゐると云へば人聞きはいいが、また實際、幾分の義俠心らしいものも手傳つてはゐるんだらうが、それも、育て上げれば、金になるといふことを知つてゐたからだ。或は、もう少し穩かに云へば、今になつて、それに氣がついたんだ。

さと　その話や知らんだつたばつてん、おつ母さんな、いつでも、男をもつなら西洋人に限るて、そぎやん云ふとつて……。わしの前でも、平氣でそぎやん云ふとばな。

眞壁　それや、自分がいゝ籤を抽き當てたからさ。それで、お前にもフランセを世話しようつて云ふのか。

さと　まさか……。

眞壁　どう云ふんだい。毛唐は親切でいゝつて云ふのかい。

さと　それよりか、一番、のんびりしとつてよかて云ふとたあ。

眞壁　あの婆さんが云ひさうなこつた。

さと　わしや、初手から見ると、よつほど變つたか知らん……？

眞壁　おれのところへ来てから、少しは利口になつたくらゐるものだ。おれはお前を教育しようと思つたことはないが、お前はなかなか心掛がよかつた。しかし、いろいろ考へてみると、お前をまたお父つつあんの手へ戻すことは、なんだか、あぶないやうな氣がするなあ。

さと　……。

眞壁　やつぱり此の土地にゐた方が、何かいゝことがあるやうな氣がしやしないか。

さと　……。

眞壁　明日の船で、此の土地を離れるつていふことは、逃れられない運命かどうか。寧ろ、おれといふ人間がある爲めに、さうなるのではないか。かう考へてみると、おれは、今、お前の運命について、もう一度神に訊ねて見なければならぬといふ氣がし出した。——おれが神といふのは、お前の本心だ。



さと ……。

眞壁 おれに氣兼ねはいらないよ。お前は全く自由なんだ。どうだ、やつぱり國へ歸るか？ それとも、船を斷つて、もうしばらく此處にゐるか？

さと ……。

眞壁 それ見ろ、お前はまだ迷つてゐるぢやないか。

三

硝子戸越しにホテルの食堂が見えるヴェランダ——食堂の内部が明るいのに反して、外はわづかに人の顔が見分けられるほどの暗さ。

ヴェランダの一隅には、さとがテーブルに突俯し、その傍でやすが背中をさすつてゐる。

食堂は、今、宴會の最中である。

眞壁と三谷とを中心に、その左は、三谷夫人、右は空席一つ、これに向ひ合つて、金田、鷗瀨、島内、岡などの姿も見える。

けばけばしい、染模様の著物を著た八號の女たちに交つて、とみが酌をして廻る。

眞壁の正面に起ち上つて、テーブル・スプーチをしてゐる巖乗な半白の老人は納富（六十）である。

納富 ……さういふわけで、一介の劍道師範たる私は、今を去る二十五年前、内地の熟



練な農夫二十家族、五十名を引き連れて、此の地に渡つて参りました。

鵜瀨 (酒のまはつたらしい調子で) その話はもう三度聞いた。

納富 因循にして氣概なき此の地方の青年は、悲しい哉、わが劍道の精神を解せず、私の素志は空しく今日に至つたのでありますが、一方、模範農場の經營と、農作指導の事業は、著々とその歩を進め、その翌々年には、佛蘭西政府より、名譽ある橄欖褒章の贈與を受けました。今日、わが日本國民の需要に應じ得る印度支那米の産出は、實にその期間に於て、確乎たる基礎を作り得たものと信じます。然るに、これらの日本農夫は、その技術に於てこそ、誇るに足るべきものでありましたが、國家百年の計を立つる精神的訓練に於ては、甚だ缺くるところがありました結果、或は病氣と稱し、或は報酬の不満を唱へ、或は、父親が亡くなつたからとか、或は嫁を貰はにやならぬとか申して、一人還り、二人還り、遂に、私一人を置き去りにして、悉く歸國してしまつたのであります。

鵜瀨 もうわかつた、わかつた。おい、お千代、先生にお酌をしろ。

納富 大分、座が亂れてまゐりましたから、これくらゐで止めますが、要するに、植民地に於ける同胞の團結は……。

鵜瀨 (起つて行つて納富を席につかせ、無理に盃を押しつける)

納富 よし、よし、もう少しだから……(起たうとするが、鵜瀨は起させない)

金田 おい、鵜瀨君、いゝ加減にしろよ。(途方にくれ) それでは、甚だ不體裁であり

ますが、先生のお話は何れ此の次の機會に伺ふとして、眞壁さん、どうぞ……。

眞壁 僕は、もう別に……。

金田 それやいけません。それぢや、形がつかない。

鵜瀨 (なほも、しつこく、納富にからみついて行く)

納富 (それを突きつけ) うるさいッ。

此の聲に驚いて、さとは、顔をあげる。

やす なんでもないんだよ。どぎやんかい、ちつたよかい？

さと (うなづく)

やす あぎやん飲むとだもね、そらあ苦しか筈だ。

食堂の内部は、異様に緊張した長い沈黙が続く。

やす そんなに、自動車が善うはなかつた。無茶に急ぐとだもね……。おれでも、頭のふらふらしたつばい。



此の時、食堂で、また話聲がしはじめる。

金田 かうしてゐてもなんですから、三谷さん、それぢや一つ……。

三谷 ……。

眞壁 そんな形式的なことはどうだつていゝぢやないか、君。かういふ會を開いて下さるのは有りがたいが、挨拶を強ひられるのは困るよ。植民地には、植民地らしい交際と禮儀とがある筈だ。酒を飲んで、馬鹿話でもすれや、それでいゝことにしようぢやないか。

女の聲 贊成……。

金田 それぢや、さういふことにしますか。岡君、手品でもやつたらどうだ。

岡 今日は駄目です。酔ふとつて駄目です。島内さん、なんかやんなはり。

島内 ……。

三谷 此處にゐるねえ、さんたちは、三味線を弾かないのかい。

金田 弾ける人もゐるんだね。

三谷 さつき家内とも話したんですが、かうしてゐると、丸で日本にゐるやうですね。日本にゐて、少し變つたことをしてゐるやうな氣がしますよ。

眞壁 君が一人で來たら、さうでもないんだよ。君達御夫婦を除いて、どれもこれも、

内地にゐさうな人間は一人だつてゐやしない。みんな少しづつ、日本人でなくなつてゐるよ。

納富 わたしはさう思はんですな。なるほど植民地のふしだらな生活が、骨の髄まで滲み込んでゐる人間も、一人や二人はゐませうが、大かたは、いざと云へば、これでも日本人です。少くとも、わたしは、飽くまで日本人としての……。

眞壁 僕の云つたのは、さういふ意味ぢやないんだが——さうおつしやるあなたにしても、失禮かも知れんが、何處か海外放浪者の特徴を具へてをられる。僕は無論、思想的にも、感情的にも、一個のコスモポリタンです。三谷君のやうな人から云へば、僕などは、立派に世界ゴロの仲間にはひるんだらうが、納富さんなんかは、かういふ名稱を著せられることは不服でせうな。

鵜濤 わたしはどうです。

眞壁 君か、君は、先づ、植民地ゴロといふところだね。

鵜濤 植民地ですつて……。なにもさう、階級をつけないだつていゝぢやないか。西洋人をお神さんにもつてたからつて、世界中を股にかけたやうなこたあ、云つて貰ひます



まじ。

岡 上海から新嘉坡までは、全く鵜瀨さんの縄張りだな。

鵜瀨 寫真屋は黙つてろい。

眞壁 何をそんなに威張つてるんだ。同じ植民地ゴロでも、野心勃勃たる奴は、あれでなかなか愉快です。何時か此處にも来たんだが、例の、バンコックで齒醫者をしてゐたといふ男なんか、免状もなんにも持たずに、暹羅の金持から治療代をしこたまふんだくつてたんだからね。向うで怪しいと思ひ出した頃は、もう姿を晦ましてゐたんだ。さうして、香港に現れた時には、ちゃんと、基隆運輸株式會社支配人といふ名刺を作つてゐる。それから、ホテル代を一月分踏み倒して、こゝへやつて来た。僕は、そんな手には乗らないが、金田君なんか、大分怪しげな翡翠を買はされてゐたぜ。

金田 ありや、一杯食ひました。

眞壁 それがさ、あの男にやら、瞞されてもそんなに腹が立たないよ。どこか愉快なところがある。自分さへ安全なら、大いに聲援でもしたいつていふやうなところがある。

金田 冗談ぢやない。

眞壁 僕は、自分にもさういふところがあるからかも知れないが、快活な悪事といふも

のには、そんなに反感が起らないんだ。なんにも出来ないで、不平ばかり並べてる奴は、人間の屑だと思つてる。

鵜瀨 (起ち上り) なにを……。

金田 君のことを誰も云つてやしないよ。

鵜瀨 おれは、人間の屑か。よし……。

(眞壁の方に近づいて行く)

金田 (それを遮らうとする)

島内 (起ち上り) 鵜瀨さん、さ、あつちへ行かう。

鵜瀨 (二人の手を振り拂ひ) 誰が今迄、その人間の屑をこき使つたんだ。一と晩中、荷役の見張をさせたのは誰だ。自動車にも乗せず、日に三度もアロンへ走り使ひをさせたのは誰だ。朝の間に、チャンの苦力を五十人驅り集めると云つたのは誰だ。

眞壁 おれだ。——そのうち、どれか一つ、満足に出来たことがあるか。今、こんなことを云ひ出す必要はない。しかし、君が、さうして僕のやり口を非難するなら、僕の方にも云ひ分がある、此處にをられる諸君には、いろいろの意味で、お別れの挨拶がしたいのだ。その挨拶には、また、いろいろの點で、感謝の意を含めたいと思つてゐる。し



かし、君だけには、今迄の僕に対する態度から見ても、一言も云ふべきことはない。黙つて別れることが、一番穩かな挨拶だ——さう考へてゐたんだ。

鵜瀨 八十ピアストルの月給で、そんな仕事ができると思つたら、大間違ひだぞ。

三谷 おい、君、そんなことは、此處で云はなくなつたつて、いくらも云ふ時機があるぢやないか。みつともないからよし給へ。

鵜瀨 云ひたいのは月給のことぢやないんだ。人を使ふなら、人情を辨へろと云ふんだ。島内を見る。あゝやつて神妙な顔はしてゐるが、心の中では、我輩と同じやうに、貴様を恨んでゐるんだ。

島内 鵜瀨さん、何時僕がそんなことを云つた。

鵜瀨 云はなくなつたつて、我輩にはわかつとる。

金田 よせつたら……君はそれがいかんのだよ。お互に云ひたいことを云つたら、きりが無い。過ぎ去つたことは過ぎ去つたこととして、愉快に飲まうぢやないか、愉快に……。(鵜瀨を席に連れて行き、盃を差す)

長い沈黙。

やす ムツシユウ・眞壁の腹きやあた(腹を立てた)顔、はじめて見た。

さと 頭の、破るゝごとある。

やす 部屋に戻つて寝るか？

さと ……。

やす 明日の朝は早かつたろが。もう寝た方がよかばい。

食堂では、人々が小聲で話し合つてゐる。

やがて、

三谷 (起ち上り) それぢや、われわれは、これで失敬します。どうも有りがたう。

三谷夫人 (これも席をはなれて一同に會釋する)

眞壁 僕も失敬しよう。お先へ……。

三人は食堂を出る。

金田 今日みんな少し變だ。

納富 こんな宴會ならやらん方がいゝ。

岡 ムツシユウ・三谷の奥さんなんか、びつくりしなはつたらう。

島内 鵜瀨さん、いけないよ、あんなこと云つちや……。

とみ 酒は、もうよかゝな？



金田 あゝ、もういゝ。それから、ねえさんたち歸つてもいゝよ。

納富 さうさう、金田君、あんたのところに、からすみがあつたね。あれ、少し欲しいんだがね。

金田 からすみ……あれや、もう、みんなでしたよ、先生。

納富 みんなか。そいつあ、残念だ。(起ち上り) それぢやね、ごまめを二合ばかり届けてくれんか、明日でいゝから……。

金田 よろしうござんす。

納富、出で去る。

岡 寫眞はどぎやんします、金田さん。

金田 あ。さうだ、忘れてた。また今度にしよう。

岡 しようなか幹事さんだなあ。(かう云ひながら、席を起ち、ヴェランダの方に出て来る。

さうして、女たちから離れ、一隅の椅子に倚る)

島内 (續いてヴェランダに現れ、岡の近くに座を占める)

金田 おい、みんな行つちまつちや、困るぢやないか。この酔拂ひ先生、誰れが連れて歸るんだい。

よねが食堂に現れる。

よね もう濟みやしたか。

金田 婆さん、どうかしてくれ、この男……。

よね ほつとけば、よかぢやツせんか。(かう云ひ捨て、ヴェランダに出て来る)

やす (よねを見つけ) 一寸、これば見てくれな、おつ母さん、此處へもをるとはな、女の酔拂ひの……。

よね どうしたと？ そぎやん苦しかゝい？ さう云ふと、ちつと亂暴だつたもんね、

今日は、何時ものおさとさんぢやなかつたもの。(腰をおろす)

食堂では、金田が、しばらく女たちとこそ話をした後、ヴェランダの方を一寸のぞいたまゝ出で去る。

すると、女たちは、一齊にテーブルを圍み、残り物をつまみながら、小聲で雑談をしはじめる。時々笑聲が起る。

やす (岡に向ひ) あんたは可笑しか人な。用もないのにこぎやんところへ出て来て、何ばぢろぢろ見とると……？

岡 もう喧嘩は御免だ。人の顔さへ見れば喰つてかゝるなあ、よくない癖だよ。おやす



さん、おらあ、みんながもうちつと、お互の氣持ば尊重し合ふごつしたかて思ふとたい。  
やす (相手の言葉が耳にはひらないやうに) 兎に角、わしや、あんたといふ人が眼ざはり  
でしよんなかぢや……。

岡 どうも濟みまつせん。

とみが現れる。

とみ 島内さん、ムツシユウ・三谷があんたに一寸げな……。

島内 今頃、何の用だい。

とみ 今、奥さんの肩ん上、やもりの一匹天井からつこけえツ(落ちて)來たげなけん、  
そのことかも知れんたい。

島内 やもりが……? やもりとおれとどう關係がある。(かう呟きながら出で去る)

とみは食堂の方へ行く。

食堂にゐる女たちは、ヴェランダをのぞき、よねに會釋して、それぞれ出て行く。

やす あアあ、わしや、もういやになつてしまふた。

よね なんがや?

やす こぎやんしとるとがたい。病氣なんぞ、どぎやんなつてもよかけん、戻ろかしら

ん……。

よね 病氣のなほるまでや、戻つて來るなていふとぢやけん、早う病氣はなほすとよか  
ぢやなかツか。

やす ところが、そぎやん早うはなほらんとぢやもん……。何時までもこぎやんしとる  
と、ろくなこたありやせんええ。

よね そんな時や、そんな時の話たい。お前がそのつもりでをればよかばツてん、ムツシユ  
ウ・シヨオドロンにして見れば、代りの女はいくらでもあるとぢやけんね。

やす さうばかりも云はれんたい、これでもな。あら、つん眠ツてしまふたツばい、  
この女は……。

よね 随分窮屈だつたらう、二年間、あゝいふ暮しをしとつちや……。

やす わしなら、二日も辛抱はでけんなあ。ばツてんが今度はちつと羨しか。

よね お前も、そぎやんした氣になつたかい?

やす 尤も、わしなら、その金ばもつて、上海にでも遊びに行つて來る。日本へ戻つた  
つて、しようんなかつだもね……。

よね そらあまあ、別の話なるばツてん、これから、日本に戻つて、一體どぎやんする



氣だろかい。これで本人は、それほど、喜んどらんとばい。

やす　　こん女は、どぎやんことあつたてちや、それほど嬉しさうな顔はせんと……。そ  
ん代り苦勞もなかごとある。

よね　　日本に戻ることに、それほどうれしうなかわけは、已にやわかつとるばつてん。  
さうかと云ふて、どぎやん話になつとるものば、引き留むるわけにも行かず……。

やす　　わしにもわかつとると……。それぢやけん、云ふとた——あんまり人次第ぢやけ  
んいかんて……。

よね　　ほんに。今日もシヨオロンの濱で、しみじみ己に云ふたつなるばつてん、ムツシ  
ユウ・眞壁が此處へをる間は、どうしても發たんわけにや行かんて、そぎやん、自分で  
きめとるとぢや。

やす　　日本に戻らんなら、金はやらんて云ふとか知らん……。

よね　　さうぢやなかつたい。今朝なんぞ、どつちでも自分の好いたやうにせろて、そぎ  
やん云ふたげな。船の方は、今から取り消せばなんでもなかつぢやけんて……。

やす　　それぢや、なんのこたなぢやなかつかな。やつぱり、いざと云へば、戻つた方  
がよかごだる氣のするとだろた。

よね　　うゝん、ムツシユウさへをらんなら、自分ぢや、此處へをりたかて、そぎやん云  
ふとつた。

やす　　妙な義理ぢやなツかな、そらあ……。よし、そんなら、わしが引止めて見しゆう。

おい、おさとちやん、風邪引くばい。

此の時、とみが、慌てゝはひつて来る。

とみ　　あのなあ、おつ母さん、今なあ、またロオラさんが來たつばな。

よね　　それで、どぎやんした？

とみ　　黙つて二階へ上つたツた。

よね　　そぎんこつさせちや、仕様なぢやなツか、お前がをつて……。

とみ　　それでも、どんどん上つて行くとだもね……。

よね　　そんなら、よかけん、早う食堂ば片づけさせろ……。

とみ　　岡の間拔が、また寫眞機を忘れて行つた。

やす　　(笑ひながら) どつちが間拔けだいろ。そけえをるぢやなツか、岡さんな……。

とみ　　御免なつせ。知らんだつた。(きまり悪るさうに走り出す)

さと　　(ぼんやり) こゝは、何處けえ。



やす あら、よつこつしよ(驚いたの意)、氣味の悪るか。何處のつもりでをるとけえ。

さと (あたりを見まわし) 宴會、もう濟んだつかな。

よね しつかりせんかい、冗談そつたんのごたる。それで明日あす發たるゝとかい。

さと ……。

やす 頭痛はもうなほつたかい。

さと うん。(かう云つたと思ふと、急にしくしく泣き出す)

やす あら、どぎやんしたて云ふと……？ ひよくうツと(急にの意)、いろいろなこつば思出おもだやたけんだろ。どぎやん云ふたつて、そらあ、ほかのことたあ違ふけんね。

よね あんまり、そばから、なんのканのつて云はん方がよかばい。

長い間。

やす 俺共おつともと違うて、やつば、一途いつに思ひ込むたちだつたばいね。今迄ん様子ぢや、案外平氣あまらしい見えとつたばつてん……。

長い間。

よね さあさあ、そぎやん泣なやあとつたてぢや、どぎやんもなりやせんとぢやけん、これからのこつば考へて、氣きは太ふたうもつこつたい。ムツシユウのことなんぞ、早う忘れて

しまうた方が惻巧あつこもんばい。妙なこと、それでも、今日になつて、ひよくうツと……。

やす そらあ、しよんあるもんかな。いよいよつていふ晩ばんだもね……。

さと そぎやんぢやなかつ。それで悲かなしかツぢやなかつ。

やす そんなら、國くにに戻りたうなかで、泣なあるとけえ？

さと ……。

よね さうとすれば、なほ可笑あはしかぢやなツか。そぎやん好すかんところへ、わざわざ戻らんでもよかつだるけん……。

さと わしや、なんだか、自分でもわからんと……。たゞ、明日あす發つと思ふたりや、ひよくうツと、涙なみだのこみ上げて來たツた。

やす 一人で戻るとの、寂さびしかつだらう。

さと さうか知らん……。そぎやんでもなかがとある。——わしや、男おとこと別るゝこた、もちつと辛あつかもんだらうて思ふとたりや、そらあ、自分でも不思議ふしぎならぬ何のこたなか……。今朝けさでも、あの人いろいろ云ふてくれるとばつてん、かういふ時ときや、ほんとなら、泣なかにやならんと思ひながら、それが、どぎやんしても泣なかれんだつたつ……。今なんぞ、あん人のこた、ちつとも考へとりやせんだつたのに……。それでも、つひ、胸



のつまつて……。

此の時、二階から、Mentouri Mentouri (嘘つき！ の意) と叫ぶ女の聲がきこえる。

よね そらあ、惚れた仲なりや別なるばつてん、云ふてみれや、年期奉公のごたつとちやけん、それが當り前たい。なにしろ、一時でも住み馴れた土地は、離るつていふもなあ、なんとなし、心寂しかもんたい。早かもんなあ、丸三年になるけんね。

やす さつきからも、おつ母さんと話したこつたが、あんたさへ、その氣になれやすつと此處へをつても、大丈夫、やつて行かるつとちやけんね。どつちかて云へば、あんたなんぞ、その方が仕合せかも知れんとたあ。當分遊んどらるゝ金はあるとちやし。そのうちに、よか運の向いて來つたい。なあ、おつ母さん。

よね 己も、今日、濱で、それば云ふたつた。

さと つまらんと……。わしにや、どうしても、それが出來んと……。今更、それば云ひ出すてこたあ出來んと……。そぎやん云へば、あの人、さうしろて云ふにきまつとる。いかなんぞ云やあせん。ばつてんが、それが、あの人にわるうて仕様なかつたもね。どぎやんしても、それちや濟まんでいふ氣がすると……。

やす どうしてや？ 自分の好いたやうにせろて云ふとだらう？

さと それがさい。さうは云つても、あの人、氣持から云へば、わしを國に戻したかつたもね。國に戻つたてちや、わしが仕合せになるとは思つとりやせん。それでもが、やつば、わしを國に戻した方が安心するとたあ。それが、わしにやわかるとだもね。やす そらあ、あんたがさう思ふだけたい。あの人、安心しうが安心しまいが、あとのこたあ、どうしてもよかちやなつたか。あんたのかうしたかて思ふことば、させてくれさへすれや……。

さと それがわしにや出來んとちやけん……。あの人、かうせると云ふて、それば、その通りすると善うなかことのあるとたい……。わしやあの人、氣持だけは、もうわかつとるつもりたい。ちやけん、言葉にも顔色にも出さんやうなこつば、どこかで感づつとたあ……。さうすると、もう、どぎやんも出來んと……。その通りになつてしまふとだもね。

よね なんべんも云ふばつてん、お父つつあんが、あんな人でなかつたりや、己でもが、國に戻ることは勸むるとちやが、どうにもかうにも、あれちや、わざわざ苦勞ば重ねに行くやうなもんちやけんね。それよりや、こつちで、ちやんとした男の世話にでもなつて、からだば落ちつけた方がいくら樂ぢやら知れやせんからな。あんたほどの器量なら、



望み手はいくらでもあるし、それこそ、おれでも、ほつときやせんたい。(間)そんなら、ムツシユウさへ、をらんなら、國に戻るとば見合せてもよかて云ふとかい。

さと ……。

二階の女の聲が益々激しくなる。一同はそれとなく耳を聳てる。

よね 何か都合ばつくつて、ひと船遅らすことにすれば……？ さうすれや、ムツシユウは先へ發つてしまふし、あとは、こつちの勝手ぢやもん……。なあ、岡さん、それがよかなあ。

岡 僕は、おさとさんの好いたやうにするがよかて思ふ。

やす そぎやんこたあ、わかつとるぢやなツか。それぢやけん、好いた通りさする話ばしとツとたい。

よね 今迄、其處をつて、己共が話ば聞いとつたんぢやけん、一人だけ善か面しゆうてしたてちや、そらあ出来んたい。仲間入りばせんと承知せんけん……。

岡 僕は、あんた達の仲間入りやせんたい。ばツてんが、僕一人の考へで、おさとさんに發つこたあ見合せち貰ひたか。僕は、おさとさんに、はツてかれば(行つてしまはれるとの意) 此の土地にやをられん人間たい。第一、美しかもんと云へば、一體、何があ

るか。男は狼のごつ、餓え、女は牝犬のごつ、恥知らずたい。そんな上、自然はと云へば、黄色か熱と、灰色の空氣に傷められた不健康そのものゝ姿たい。そんな中で、たつた一つ、僕の眼を樂しませ、心を慰むるもなあ、おさとさんの存在たい。僕は、もう決して、おさとさんにどうしてくれとは云はん。そらあ、自分の夢ば自分で醒ますやうなもんたい。僕は、たゞ、おさとさんば自分の眼の届くところへ置いておきたかだけたい。僕は、一生、寫眞師らしう、レンズを透しておさとさんの姿を眺め暮さうと思ふとる。そんなら、よかろうがな、おさとさん……。今日、シヨオロンで、あんたは一人、僕が向けたレンズを避けたのはどういふわけたいな？ それはもうよか。訊きますみやあ。ばツてん、僕が何時でもあんたに向けとる心のレンズは、あんたも避くるこたあでけんがな。

此の時、突然、二階で一發の銃聲が響く。

鴉濤を除く外、一同の視線は、期せずして階上に注がれる。

長い沈黙。



眞壁の部屋——眞夜中

寢臺の一方に、眞壁が頭に繻帶をして寝てゐる。

さとはその傍で、ぼんやり椅子に腰かけてゐる。

三谷はやゝ離れて、これも椅子にかけてゐる。

よねが、立つたまゝ話しをしてゐる。

よね

それがね、いろいろなこつば訊かるツとですよ。わしや、かう云ふてやつた。

——こつちは女ぢやけん、ロオラさんの味方にもなるばつてん、日本人としちや、ムツシユウ・眞壁の肩を持つて……。さうしたりや、コンミツセエルも笑うとりました……。

眞壁 三谷君、君が、さつき駈けつけて来てくれた時、あの女は机に向つてたらう。何を書いてたと思ふ。

三谷

知らない。あの時、なにやら、云つたやうだつたね、僕たちの方を振り向いて……。

……。島内君は「誰もこの部屋にはひるな」つていふやうに聞えたと云ふんだが……。

眞壁

それは僕も気がつかかつた。しかし、あれは、君、手紙を書きかけてゐたんだ

よ。警察の奴が訊いたら、さう云つてた——ベトログラアドにゐるお袋のところへ出すんだつて……。

三谷

すると、君に會ふまでは、あんなことするつもりはなかつたんだね。

眞壁

それやわからん。話の結果によつてはと思つてゐたかも知れんよ。不斷ピストル

なんか持つて歩く女ぢやないんだから……。兎に角、あいつを向けられた時は、流石に

驚いた。しかし、どうする暇もないんだ。いけないツと思つた瞬間、頭がんとした。

それでも、煙の中に、あの女の姿がはつきり見えたので、すぐにその手からピストルを

もぎ取つたんだ。さうすると、奴さん、急に、両手で顔を蔽つたまゝ、机の方へ歩いて

行つた。君たちがすぐ来てくれなかつたら、僕があの女を殺してゐたかも知れないよ。

三谷 そんなことはあるまい。君は、非常に冷静だつた。何事もなかつたやうな顔をしてゐた。

よね

コンミツセエルも、ムツシユウ・眞壁は、どうして笑つとつたかて、こぎやん



訊いとりました。

眞壁　もう、その話は、よさうや……。遅いから、君たちもねむいだらう。寝てくれ給へ。

三谷　僕は平氣だがね。君はどうだ。まさかすぐは寝つかれない。

この時、三谷夫人がはひつて来る。

三谷夫人　如何でいらつしやいます。

眞壁　やあ、どうもお騒がせしました。もうなんでもありません。

三谷夫人　あたくし、なんだかまだ心配ですわ。

眞壁　随分、妙な人間ばかりゐるところでせう、印度支那つていふところは……。

三谷夫人　でも、こんなことは、東京の眞中にゐたつて、あることですわ。たゞ、この土地で、かういふことがあると、さう申しちやなんですけど、さもありさうなことつていふ氣がいたしますわ。

三谷　おい、おい、無茶なことを云ふな。

眞壁　ほんとですよ。このホテルだつて、初めて来て見ると、何かの巢窟つていふ感じですからね。電氣はこの通り暗いし、壁や天井は、あゝいふ風に雨漏りの跡だらけだし

……。

三谷　その上を、やもりがあんなに匍ひまはつてゐるしね。

よね　それや、このホテルばかりぢやありませんばい。

三谷夫人　あら、何處にでもゐますの。

眞壁　ゐますね。社宅の方は、もつとひどいですよ。もつと大きな奴がゐますよ。

よね　ところが、あらあ、どぎやんもしやしませんけんな。わしの知つとる佛蘭西人は、

あれば一匹、ビールの中に入れて、いつしよに飲み込もうでしまひましたばい。

三谷夫人　まあ、氣味がわるい。

三谷　しかし、お前は、日本を發つて来る前から、大に、印度支那を讚美してたぢやないか。

三谷夫人　あたくしの云ふのは、もつと、奥の方ですわ。安南の森の奥ですわ。

三谷　なんだつけな。——孔雀と錦鶏鳥とが、なんとかの花の間を飛びまはつてゐるつ

ていふんだらう。さういふところ、あるかい、眞壁君……。

眞壁　あるかも知れんよ。どうかね、婆さん……。

よね　さあ、なんのことやら、よくわかりまつせんだつた。虎は、ちいつとこの奥に行



くと、をるごたるな、アナミツの部落へ善う出て來るて云ひますたい。人間の子供が好物ぢやて云ひます。

三谷 少し話が違ふやうだね。

三谷夫人 全く……。

三谷 婆さんは、この土地に二十年からゐるつていふ話だが、随分、いろんなことに出てくわしたらうね。

よね できわしましたとも……。日本人ばかりぢやありませんけん、これまでわしが知り合つて來た人間で云へば……。前の連合が、佛蘭西人でツしう。毎日、佛蘭西人同志のことを、見たり聞いたりしましたたい。それでも、人情ていふものは變らんもんですな。アナミツの方は、使ふとるもんが主おもですけれども、あの人達にやあの人達の世間ていふもんがあつて、やれなんのかんので、それ相當にごだごたがあるてすな。——かういふ土地で、重だつた人間になると、苦勞が多かもんな。わしなんぞは、學校もろくに行つとりまつせんばツてんが、年配が年配ぢやけん、若い女むすめたちに、おツ母さん、おツ母さんて、うるさい相談ば持ち込まれますしな。

三谷夫人 (さとに向ひ) こんなことがあつちや、奥さまも、明日お發ちになるつてわけ

には行きませんわね。

さと (眞壁の方を見て) さあ……。

眞壁 (黙つてその視線を避ける)

長い沈黙。

よね もう、わしどめにや用はありますせんな。

眞壁 あゝ、もう別がない。やすんでくれ。

よね そんなら、おやすみなはりますツせ。

よね、出で去る。

三谷 (妻に) 僕達も引上げようか。

眞壁 あ、君達は、迷惑でなければ、もう少し、話してつてくれないか。實は、奥さんには是非聽いて貰ひたいことがあるんだ。

三谷夫人 どんなことでせう。伺ひますわ。

眞壁 なに、大したことぢやないんです。僕は今迄、自分のしようと思ふことを、人に相談したことなんかは一度もないんですがね。今度だけは、どうしても決心がつかずにあるんですよ。おさと、お前は、一寸下へ行つてろ。



さと、三谷夫婦に會釋して出で去る。

三谷 今時分下へ行つたつて、君、ゐるところなんかあるのかい。

眞壁 あいつあ、何處にゐたつてかまやしないんだよ。どうせ、下が家うちみたいなものなんだ。それはさうと、奥さん、あの女をどう思ひます。

三谷夫人 どうつて……。ほんとに、おやさしい方ですわ。

眞壁 奥さんなんか、ら御覽になると、僕たちの關係は、さぞ不純なものやうにお考へになるでせうが、そのために、あの女を輕蔑しないでやつて下さい。

三谷夫人 輕蔑だなんて、そんな……。でも、いろいろ伺つてみると、あの方もこれから、お大變ですわね。

眞壁 もう、そんなお話をしましたか。

三谷夫人 いゝえ、詳しいことは、なんにもおつしやらないんですけれど、たゞ、あたくしが、お察ししてただけなのですわ。

眞壁 僕は、あの女に對して、するだけのことはしたつもりでゐるんです。ところが、いざ國へ返すといふ段になつて、大きな不安を感じ出した。と云ふのは、あの女が、國へ歸ることを、それほど悦んでゐないといふことゝ、もう一つは、その理由が、至極有

力な理由だといふことなんです。

三谷夫人 さうおつしやれば、さういふところも、おありになるやうですわね。

眞壁 さうでせう。それについて、あなたに何か云つてましたか。

三谷夫人 いゝえ、はつきりしたことは、さうおつしやいませんけれど、なんだか、御自分でも、不安なやうなお口裏でしたわ。

眞壁 僕は、それで、よつほど、計畫を變へさせようかと思つてみたんですが、どうもそれが云ひ出せない。可笑しな話ですが、あいつの顔を見ると、ついまよつてしまふんです。

三谷夫人 でも、お國へお歸りにならないとすると、ほかに、いらつしやるところでもおありになるんですの。

眞壁 ありやしません。まあ、此處にゐて、どつかへからだを落ちつけるより、しかたがないでせう。

三谷夫人 でも、此處ではねえ……。

眞壁 そんなら、何處へ行つても同じことですよ。この土地なら、顔馴染もあるし、また以前のやうな生活に落ち込む前に、誰か世話をするものがあるだらうといふ氣がする



んです。本人も、それを望んでゐるんぢやないかと思ふんですよ。佛蘭西人の妾になつて、一生樂な暮しをしてゐる日本の女が随分ありますからね。

三谷夫人　まあ、あなたまで、そんなことを……。

眞壁　ほかの女ぢやありませんよ。あゝいふ前身の女ですよ。

三谷夫人　それぢや、折角、あなたがこれまでにしてお上げになつたことが、なんにもなりませんわ。

眞壁　奥さん、僕を買ひ被らないで下さい。あの女が何んと云つたか知りませんが、僕は、自分のリベラルな行爲を反省して、今更それを責める氣持は毛頭ありませんし、あの女の將來についても、徹底的に考へてみる勇氣はないんです。たゞ、自分の眼の前で、あの女が、これから歩いて行く方向を決めようとしてゐる場合、僕の意思がそこに働くことを非常に恐れてゐるといふだけなんです。もう少し穿つて云へば、僕といふ人間の存在が、あの女の運命を決定することになると大變だと思ふだけなんです。白狀しますが、かういふ氣持は、僕が今迄経験したことのない氣持です。

三谷夫人　男の方つて、割合にさういふことは無頓著なものですわ。

眞壁　かうして、もう船まで決めてある。明日はその船が出ようとしてゐる。それに、

あの女は迷つてゐます。僕も、それを、發つなどは云へずにある。もともと、國へ歸へるといふことは、それこそ、あたり前のことのやうに思つて、決めた問題なんです。僕が此處を引上げる。あの女とこれ以上一緒にゐるわけに行かない。差し當りあいつの行くところがない。旅費さへあれば、國へ歸るだらう。で、いくらか金をやるといふ話をしたんです。

三谷夫人　それが一番自然ですわ。

眞壁　ところが、今になつて考へてみると、あの女の手には、二千圓といふ金をはひつた。その金があれば、おやぢのところへなんか歸らなくつても、當分、一人で暮して行くことができます。それなら、日本よりも此處の方が、あの女にとっては佳みいゝに違ひない。金がなくなつても、慌てる必要はない。そんなら、何んのために、明日、この土地を離れるのだ、さういふ疑問が起つて來たんですよ。

三谷夫人　でも、それは、あんまり實際的すぎるやうに思ひますわ。そのお考へは……。

眞壁　實際的……。さうでせう。僕も、これくらゐ實際的な考へ方はないと思つてゐます。しかし、その實際的といふことが、僕を一番誘惑するんです。それにですよ、それほど僕の氣持は動いてゐながら、その考へを、はつきりあの女に傳へるといふことが、



何んだか、してはならないことのやうに思へる。それについて、昨日からいろいろ自己解剖をやつてみるんですが、かういふことも、一つの理由だらうと思ふ。——それは、恐らく、三十の聲を聞いて以來、絶えて音沙汰のなかつた僕のロマンチズムが、久々で、しかも最後の別れを告げに來たんだと思つてゐるんです。三谷君、まあ、笑はずに聴いてくれ。——僕は、あの女を一度は、ほんたうに救ひ出してやりたい、いや、少くとも、救ひ出したといふ氣持になつてみたい——まあ、そんなところぢやないかと思ふんだ。

三谷 それやさうだらう。君だつて、さう平氣で別れられるとは思はないよ。

眞壁 いや、それとこれとは違ふんだ。うるさいだらうが、もう一度云ふよ。あの女が國へ歸るといふことは、たゞ、おやぢの手へ戻るといふことにはならない。それはどうせ無駄かも知れないが、一度は、普通の女になるといふことだ。

三谷夫人 さういふことがわかつていらつしやるんでせう。

眞壁 待つて下さい。少し上氣のぼせてるとみえて、さつきから、なんだか下らないことを云ひ過ぎたやうですが、僕が奥さんにお願ひしたのは、實は、かういふことなんです。——あの女が、若しこの土地にゐるやうになつたら、なにくれと、相談相手になつてや

つて下さいませんか。こゝの婆が、何れ、いろんな世話を焼くだらうと思ひますが、あいふ種類の女ですから、いよいよ駄目となつたら、また御承知の八號へでもころがり込むだらうと思ふんです。これだけは、僕も、やり切れない。非常に勝手な願ひですけど、さういふ場合には、一つ、女中にも使つてやつて下さい。

三谷夫人 ……………

眞壁 あなたが、若し、それを承知して下されば、僕の決心はもうきまるんです。あの女は、明日の朝までに、きつと發ちたくないといふ意志をほのめかすでせう。さうしたら、僕は、それに賛成してやります。決して、責任をもつていたゞかうとは思ひませんよ。たゞ、あの女に最後の足場を與へてやつて下さい。

三谷夫人 それやもう、あたくしどもで出來ますことなら、なんでもいたしますわ。でもほんたうに、その方がよろしいんですか知ら……。 (三谷に) ねえ、あなた……。

三谷 それは、われわれが啄を容れるべき筋ぢやないさ。しかし、實際問題として、さういふ場合、あの女ひとの方から、こつちへ相談に來てくれなくちや困るなあ、僕たちとしても、あんまり立ち入つた眞似はできないから……。

眞壁 うん、それや、勿論、さうさせる。——ですがねえ、奥さん、さつきから、あな